TOTO 通信

2009年 春号

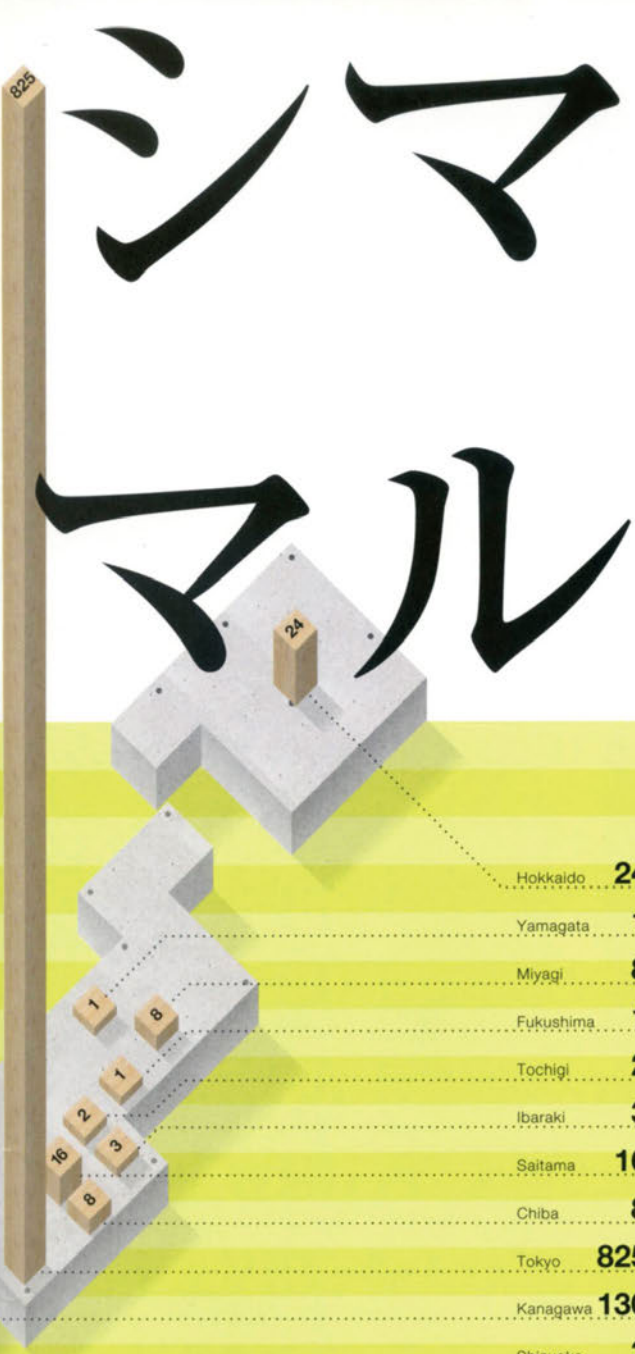
Toward a Creative
Architectural
Scene

Special Feature / Hiroshima Minimal

特集　ヒロシマミニマル

ヒロシマ ミニマル

ある特定の地域の特集を組んだら、という要望は意外に多い。しかし、『ＴＯＴＯ通信』流の特集主義でいくと、これは案外に難しい。一番の問題は、建築家をその地域に押し込めていく感じがしないでもないからだ。建築家、並びに作品に地域性なんていう判子は押したくないという気持ちがあるからだ。結果として地域特集は避けつづけてきた。しかし、広島というところだけは不思議と気にかかっていた。ものは試しで『新建築住宅特集』(新建築社) に発表された約８年分をデータとして借用、分析してみた。驚くことに関東、関西という２大経済圏をのぞくなら、発表作品数は群を抜いて多い。勝手ながら「ヒロシマ ミニマル」と題して特集を組んでみた。ミニマルと絞ったのは表層的といわれるかもしれないが、広島にはどこか究極のモダニストが多いような気がするから。もうひとつ、その裏に「ヒロシマ グローバル」と言いたい思いがあるからだ。究極のモダンデザインは、ある意味で、地域主義を超えた表現のひとつであるといっていいと思うから。



Hokkaido	24	北海道
Yamagata	1	山形県
Miyagi	8	宮城県
Fukushima	1	福島県
Tochigi	2	栃木県
Ibaraki	3	茨城県
Saitama	16	埼玉県
Chiba	8	千葉県
Tokyo	825	東京都
Kanagawa	130	神奈川県
Shizuoka	3	静岡県
Aichi	18	愛知県
Nara	5	奈良県
Kyoto	50	京都府
Wakayama	1	和歌山県
Kagawa	2	香川県
Kochi	2	高知県
Ehime	1	愛媛県

『新建築住宅特集』2001年４月号～2008年12月号（2007年１月号はのぞく）に掲載された作品を設計した建築家が、どこに事務所を構えているかをカウントしてみました。

	Page
小川晋一×鈴木博之	4
宮森洋一郎	16
西宮善幸	24
谷尻 誠	32

シリーズ

	Page
旅のバスルーム74　文･スケッチ=浦 一也	
現代住宅併走11　文=藤森照信	
地域に生きる会社47	
ギャラリー･間で展覧会をしています	
最新水まわり物語20	
news file	57
ホテル･テルメ･ヴァルス（スイス･ヴァルス）	40
益子義弘の「新座の家Ｉ」	42
健康住宅	48
クライン ダイサム アーキテクツ	50
丸の内トラストタワー本館	52

編集制作=中原大久保坂口編集室
デザイン=岡本一宣デザイン事務所
印刷=ゼネラルアサヒ

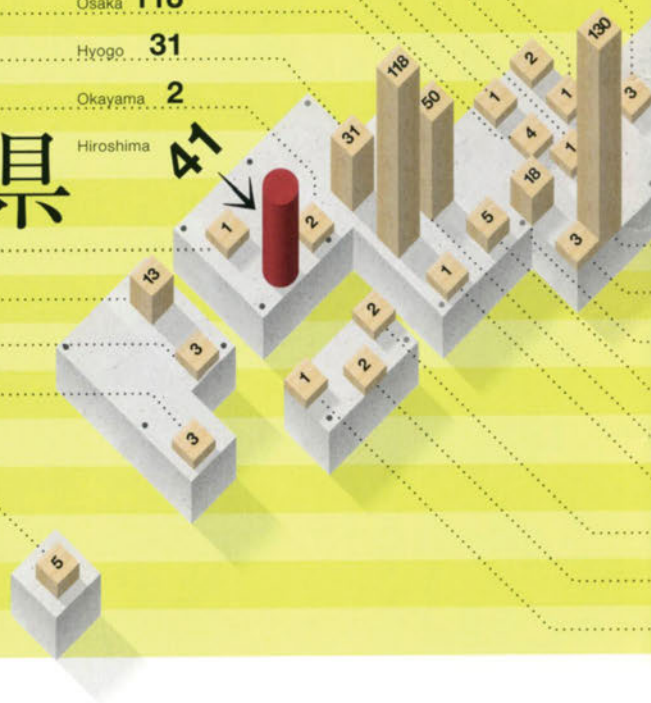
『TOTO通信』をインターネットでご覧いただけます。 TOTO Web Site → www.toto.co.jp

特集 ヒロシマミニ

Special Feature "Hiroshima Minimal"

『新建築住宅特集』(新建築社)における都道府県別設計事務所の作品掲載回数

群馬県	Gunma	3
富山県	Toyama	1
石川県	Ishikawa	2
長野県	Nagano	1
福井県	Fukui	1
岐阜県	Gifu	4
大阪府	Osaka	118
兵庫県	Hyogo	31
岡山県	Okayama	2
広島県	Hiroshima	41
山口県	Yamaguchi	1
福岡県	Fukuoka	13
大分県	Oita	3
鹿児島県	Kagoshima	3
沖縄県	Okinawa	5



TOTO 通信

Toward a Creative Architectural Scene
Number 487
Spring 2009

Contents

特集1／対談	ミニマルを貫くもの	
特集2／ケーススタディ	ミニマルを超えるとき	「鞆の浦のアトリエ」
特集3／ケーススタディ	思い出のミニマル再訪	「焼山の家+アネックス」
特集4／ケーススタディ	ディテールを消した後に	「大竹の家」

表紙=「36M HOUSE」(10〜15ページ参照)／写真=藤塚光政

対談

ミニマルを

日本の建築家はどこを拠点に活動しているか。別格の東京・大阪エリアをのぞくと、圧倒的に多いのが広島県。それはなぜなのか。またそこに何か特性をみることができるのか。そこで広島県に活動の拠点を置き、全国的に活躍する小川晋一さんと、建築史家で青山学院大学教授の鈴木博之さんの対談から、その疑問を解きあかしてみました。

写真＝小西康夫（対談）＋藤塚光政（建築）

建築家

小川晋一

Ogawa Shinichi

貫くもの

建築史家
鈴木博之
Suzuki Hiroyuki

司会・まとめ
豊田正弘
Toyoda Masahiro

拠点は広島

――（司会・豊田正弘）小川さんが建築を志した頃のお話からうかがいたいと思います。

鈴木博之　大学は東京ですよね、日本大学芸術学部。いわゆる工学部ではなくて芸術学部にいらしたのは、期するところがあったんですか。

小川晋一　もともと山口県の岩国近くの出身で、建築の世界もよく知らなかった。とにかく設計をやりたかったので、工学部は「現場」というイメージがあって避けたんですね(笑)。1学年30人くらいの小さな学科で、黒川雅之さん、仙田満さん、内藤恒方さん、添田浩さん、それから構造の佐々木睦朗さんたちが教えていらした。みなさん、30代くらいの若い先生でした。

それから大学時代の1977年に、交換留学でワシントン州立大学へ行きました。その帰りに、地球の反対をまわっていこうと思って、カナダ横断鉄道経由でヨーロッパのほうを巡ってきました。そのとき、いつも世界を見ながら建築をつくっていきたいと思ったんです。

鈴木　その後、文化庁の派遣芸術家としてニューヨークに行かれる。僕も何年かその審査をやったんですが、なかなかいい制度ですよね。留学だけではなくて、仕事をしなければいけない。

小川　ええ、1年半くらい行って、ポール・ルドルフの事務所とアルキテクトニカに勤めました。そこから帰って、さあどうしようかと。東京でどこかの設計事務所に入ろうかとも思いましたが、調べてみると20代で独立している人がけっこういるんですね。そこで、86年に山口県の実家の近くで、ほんとに田舎のほうで事務所を始めました。ニューヨーク時代にケヴィン・ローチの事務所を訪ねると、湖を見下ろす丘のお城にあるんです。そこで、マンハッタンの仕事をやっている。そういうのに憧れたというのもあります。

そういうわけでコツコツと始めて。そのうちに広島の仕事が出てきて、広島に拠点をもちました。それから、東京近辺の仕事も来るようになって、2001年からは広島と東京に事務所をもって、両方で仕事をしている状況なんです。

鈴木　しばらく前に、東京都美術館で「生活と芸術――アーツ&クラフツ展」をやっていましたが、ウィリアム・モリスは学校を出ると、ジョージ・エドモンド・ストリートという人の建築事務所に勤めるんです。彼はオックスフォードの建築家だったんですが、だんだん全国区の建築家になって、その頃に事務所をロンドンへ移すんですね。そこでモリスも仕事先が移ったのでロンドンに行き、インテリアの仕事などを始めます。

そういう流れに対して、小川さんの場合、全国区の仕事も多いんだけれども、広島をさっさと引き払うかというと、そうでもない(笑)。広島に拠点があるというのは、やはり広島での可能性をお感じになっているんですか。

建築家の集散

小川　広島にそれほど仕事があるわけではなくて。ただ、家と事務所があって、土地も買いましたし(笑)。近畿大学工学部(広島)で教えているというのもあります。

鈴木　それはそうですよね、実際。でも、仕事を始められた頃、小川さんのスタイルというのは、失礼ですけど(笑)、広島、山口近辺のクライアントには理解していただけたんですか。

小川　むしろ、よく理解してもらった気がしますね。新しいもの、進んだものをつくりたいというクライアントが、自分のまわりにはいました。きちんと話をすると、いいですね、という感じで、けっこう認めてくれたんです。

鈴木　なるほど。ただ、場所的・地域的なことでいうと、たとえば「土佐派の家」というのがありますね。土佐の厳しい気候条件のなかで、構法を改良して伝統的な材料を使って民家風のものをつくっている。これはわかりやすいんですが、広島の場合は、そういうものでは全然ない。

それから、大阪の建築はなんとなく、ああ、大阪だなっていう感じの、こだわりのあるディテールを、村野藤吾先生をはじめ、みなさんもっているような気がするんです。今回、用意された資料では、共通の、非常にスカッとした感じを受けるんですが、これが広島風なのか。

Ogawa Shinichi

小川晋一

1955年山口県生まれ。78年日本大学芸術学部卒業、77年ワシントン州立大学建築学科交換留学。84年文化庁派遣芸術家在外研究員（在ニューヨーク）、同年ポール　ルドルフ事務所、85年アルキテクトニカを経て、86年小川晋一アトリエ設立。95年小川晋一都市建築設計事務所に改称。94年近畿大学工学部助教授、2001年より同大学教授、日本大学芸術学部非常勤講師、英国エジンバラ芸術大学客員教授。　URL:www.shinichiogawa.com

小川　お好み焼きでたとえると、広島は素材を　枚　枚重ねていく、大阪はこう……。

鈴木　ぐじゃぐじゃに（笑）。

小川　そう、混ぜていく。まあ、それが建築とどうかかわるか、よくわからないですが（笑）。

鈴木　広島の文化圏には、大阪ではなくて、直接東京につながるという感じがあるんですかね。大阪と関係をつけると、大阪の下に立たなきゃならない、そんなハズはないっていうプライドがあって……。

小川　ああ、それはありますね。

鈴木　広島の近辺には、多士済々の建築家の方々がいらっしゃるんですが、サークルみたいなものはあるんですか。

小川　昔、95年に「広島若手建築家7人展」というのをやったんですよ。　番年上が村上徹さんで、宮森洋一郎さん、岩本秀三さん、西宮善幸さん、北野俊一さん、遠藤吉生さん、　番下が私と、1歳ずつ下がってくる。冊子をつくったりという時期もあったんですが、今は、みなさん忙しくなって、かなりバラバラになっています。

――　その7人展の方々というのは、第　世代という感じなんでしょうね。この方々がつくられた建築を拝見すると、ある美意識のようなものを共有されていたような気がします。ほかの地方都市にはないまとまりを感じました。

小川　ええ、今は若い人たちもいるので、いくつかのグループができて……、若い人たちは上の人とは　緒にいなかったりとか（笑）。

鈴木　それは健全な話ですよね（笑）。

それと、広島は原爆で市内がいったん壊滅していますが、戦後の建築で最初に重要文化財になったのが、「広島平和記念聖堂」（54／設計＝村野藤吾）と「広島平和記念資料館（および平和記念公園）」（55／設計＝丹下健三）です。近代建築のポテンシャルが非常に高い都市でもあることも、何か影響がありそうですね。

小川　あるのかもしれないですね。それに、建築の学校が多いんです。広島大学、近畿大学工学部、広島工業大学、福山大学、広島国際大学とあります。

鈴木　でも必ずしも広島圏の学校を出られた建築家ばかりでもないんですね。方々に散って、ちゃんと広島に戻ってくると。

小川　海外に出て戻ってくる人たちも多いですね。

「36m」のつくり方

――　ここで、小川さんの実作にお話を移したいのですが、先日、近作のひとつである「36M　HOUSE」（07／10～15ページ）を拝見しました。想像していたスケールよりずっとゆったりしているのが印象的でしたが、小川さん、少しご説明いただけますか。

小川　これがコンセプト模型（8ページ写真）で、ガレージ、コート1、リビング・ダイニング・キッチン、コート2（プール）、子ども室、多目的室、コート3、主寝室と、36mを見通せるわけです。そして36mの廊下があります。

鈴木　へえ！　いや、これはすごいなあ。

小川　10m×36mの平屋で、空間としては仕切られているので暑さ寒さは防ぎながら、南の光が入ってきます。全体は囲まれているので、プライバシーは守られています。こういう敷地ですから、そのポテンシャルをきちんと生かした空間をつくりたいと思いました。

――　天井高を2・4mくらいのつもりで見ていると小さく思えますが、実際は3mあります。またドア引手の位置が、その半分、1・5mのところにある。私の肩のあたりです。

小川　いや、最初の計画では天井高は3・6mで、もっと天井の高い空間をつくりたかった。こういうスケール感というのは、私が育った環境もあるんですかね。祖父の代は、造り酒屋をやっていたので、天井も高くて大きな家でした。

鈴木　なるほど、そうですか。これ、床は石ですか。

小川　トラバーチンです。建主さんがたいへん建築が好きな方で、ミースのバルセロナ・パヴィリオンみたいにと。

鈴木　いやあ、スカーッとしてて、気持ちいいだろうなあ。

小川　そうですね。照明器具なども全部、つくっています。ダウンライトは普通、フレームが見えるじゃないですか。消したときに見えなくなるように、パイプを埋め込んでそのエッジだ

Suzuki Hiroyuki
鈴木博之
建築史家、工学博士。1945年東京都生まれ。68年東京大学工学部建築学科卒業。74～75年ロンドン大学コートゥールド美術史研究所留学、78年東京大学助教授、90年より同大学教授（工学部建築学科、後に工学系研究科建築学専攻）。93年ハーバード大学客員教授、97～98年日本建築学会副会長、2009年より青山学院大学教授。おもな受賞＝72年毎日　日本研究特別賞、80年日本文化デザイン賞、85年芸術選奨文部大臣新人賞、90年サントリー学芸賞、96年日本建築学会賞（論文賞）、01年建築史学会賞、05年紫綬褒章。

けが見えているんです。コンセントプレートは石をはずして床下に納め、スイッチプレートはカバーを製作しています。なるべく目立たないように。

収納はけっこう設けてあります。かなりの壁面が収納になっていて、全部、隠せます。でも、パッと開くとオープン棚のように全部見える。で、人が来たら、バッと全部入れてしまう（笑）。

鈴木 そうですね、そうやって、いかにきれいに収めるかを考えないと、この空間は成立しませんね。この資料に写っているのは、実際のご家族ですか。

小川 ええ、そうです。お子さんが4人いて、子ども室にもベッドを納めた収納があります。

空間にお金をかける

―― 小川さんの建築は、初期の頃から 貫したイメージがありますね。

小川 ええ、独立した80年代後半というのは、デコン（Decon・structivism 脱構築主義建築）とか、ポストモダニズムとかの全盛期でしたが、「キュビストの家」（89）や「ミニマリストの家」（90）をつくっていたので、昔からそんなに変わっていないんです。

鈴木 基本的にヴァナキュラーなスタイルではなくて、グローバルというか、インターナショナルなスタイルを貫かれたという感じですよね。

小川 近作やプロジェクトの図面（15ページ）をまとめてきましたが、だいたい、ほかの平面図とかは、こんな感じで……。平面を見ていただくと、収納だらけです。

鈴木 非常に明快ですね。それで、収納が多いというのは空間的にはぜいたくなんですよ。

小川 超シンプルなので、コストも意外と安くなります。工務店も最初はちょっと戸惑ったりされるんですが、2回目からは、あのパターンですね、みたいな感じで受けてくれます。

鈴木 それは、システムが明快だからでしょうね。ディテールの部分というのは、ある程度、標準化されているんですか。コンセントの取り合いとか、照明の考えとか……。

小川 そうですね、多少は違いますけれど。それと全体、平面の考え方との整合性がほしいと思っていて、そこに時間をかけます。

自分のつくりたい建築というのは、ミニマルなだけでは満足できないんです。「ミニマルとマキシマルを相互に横断する住居」（『小川晋一／見えないディテール』ディテール2008年10月号別冊所収／彰国社）という文でも書いたのですが、両面性を実現したい。ミニマルな部分も、何か汚した部分もある。生活であれば、田舎も都会も両方楽しみたい。料理なら和風もフレンチも、音楽ならジャズもクラシックも。一元的に生活したくないという気持ちがあって、いろんなことが選べるような空間を考えています。

鈴木 何も置けないというのではなくて……。

小川 はい。ストイックな空間だけをイメージされることが多いんですが、実際は許容力があると思います。人間が衣替えをするように、ものが変わると中の雰囲気が変わるというぐらいの空間にしたい。とにかく空間のボリュームをつくることに、お金をかけたいという思いがあります。

鈴木 結果的にミニマルなものが出てくる、という感じなんでしょうね。

小川 ええ、そう思います。今、週の前半が東京で、後半が広島という生活なんですね。ちょっとつらいところもありますが、これも両面を楽しんでいる感じです。

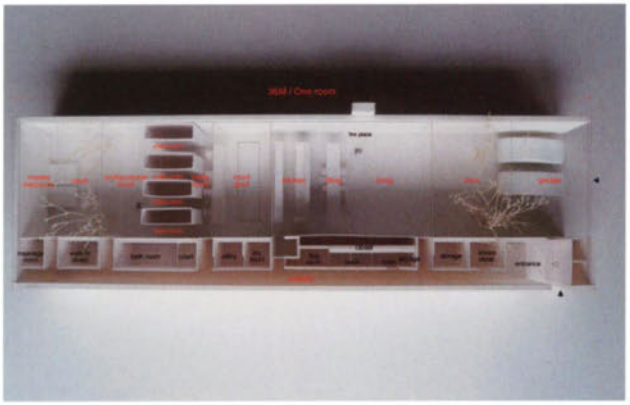
懐の深いミニマル

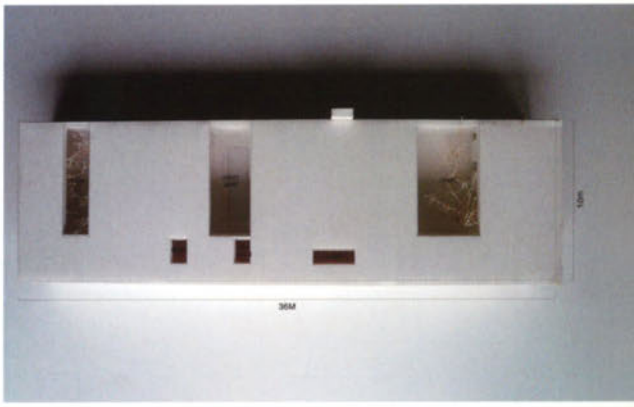
―― 鈴木さんは歴史家の目から、ミニマルな建築というのをどうとらえていらっしゃいますか。

鈴木 やはり、スカッとしているというか、明快な空間というイメージがありますね。ただ、ミニマルな空間というのは、ある程度のスケール感がないと成立しないのではないでしょうか。ミニマルな空間と、ミニマムな空間は全然違うわけで、ある意

「36M HOUSE」コンセプト模型

最初のプレゼンテーションに使われた模型。写真左は平面構成で、上側の居室コートと下側の廊下との関係がわかる。左上側に4つ並ぶ箱は、子ども室のユニット。写真右は屋根を載せたもので、大きな3つの穴がコート（中央はプール）。ほぼこのとおりに完成した。（写真提供＝小川晋一都市建築設計事務所）





Toyoda Masahiro

豊田正弘

フリーライター、編集者。1958年東京都生まれ。81年日本大学理工学部建築学科卒業。83〜89年鹿島出版会で『都市住宅』『SD』の編集を担当。89〜2008年新建築社。91年より『新建築住宅特集』編集部、98〜08年同編集長を務める。09年豊田編集室設立。

味では対極ですよね。ミニマムな空間にしようとしたら、茶室みたいに、いろんな中柱が出てきたり、踏込みがあったり棚があったり、コックピットみたいになっていくんだろうと思う。ミニマルな空間のおもしろさというのは、体育館では困る。そこはすごく難しいと思うんですよね。スケール感があって、なおかつ体育館じゃない、スカッとした空間。それは非常に難しいものだけれども、成功すればすごく気持ちのいい空間で……。だから、つくる側でも、クライアントの側でも、求める方がおられるというのは、すごくよくわかるような気がします。チャレンジしがいのあるテーマだし、それが獲得できたときの心地よさというのは、とても大きいものがあるのだろうと思います。

小川　何か、ものがなくても成立している空間、生命がある空間であってほしい。生命がそこにあると、何もものがなくても、いい空間だし、ものが置かれていても全然動じない……。

鈴木　うん、空間が壊れない。

小川　そうですよね。そういう幅のある、懐の深いものであってほしい。ディテールを見せないために努力しているつもりなんです。何か、見せていくと、ものを置くときに、いつもそれとの関係性ができてくるような気がする。それよりも、自然の緑とか光を大事にして、風が通るようにということを考えます。

鈴木　そう、ある時期までの上質な和室というのは、ミニマルな空間だったんでしょうね。だからあるものはケンカせずに置けるし……。

小川　いろいろなものをもってきても大丈夫という感じがしますね。空間のクオリティが高いものであれば。

鈴木　ひとつうかがいたいんですが、住宅の建築タイプと、ほかのタイプ……オフィスであれ、美術館であれ……そのへんの関係はどうお考えになっていますか。空間のタイプというのを、ひとつの原形をイメージしながらバリエーションをつくっておられるのか。それとも、住宅というのは、やはりひとつの特殊なタイプとお考えなんですか。

小川　全部つながっていると思いますね。基本的に、私の好きな空間をつくっている感じですから、変わらない部分は変わらないかなと。敷地からインスピレーションを受ける部分が非常に大きいので、プロトタイプという意識もあまりない。好きな空間はいろいろあって、ひとつではないという感じです。

ネット時代の建築家像

小川　昔、インターネットができる前は、広島で仕事をしていても、なかなか全国につながっていかなかったですね。ネットが普及して、急速に全国から仕事が来るようになりました。

鈴木　全国に、おおげさにいえば世界を相手につながれると。

小川　そうですね。ずいぶん変わったなという実感があります。「36M　HOUSE」の建主さんも、本で調べて、ネットでチェックして、電話されたんです。

鈴木　そうか、いろんな情報を集めて、ネットで調べて、いよいよ声を聞くと。

小川　最近はそういう方が多いですね。私がつくるのは、誰にでも好まれる空間ではないので、広島だけではそれほど依頼はないと思うんです。ただ、全国になるとアクセスしてくれる人が多くなって……。そういう時代なのかなと思います。それは、われわれのテイストに限らず。

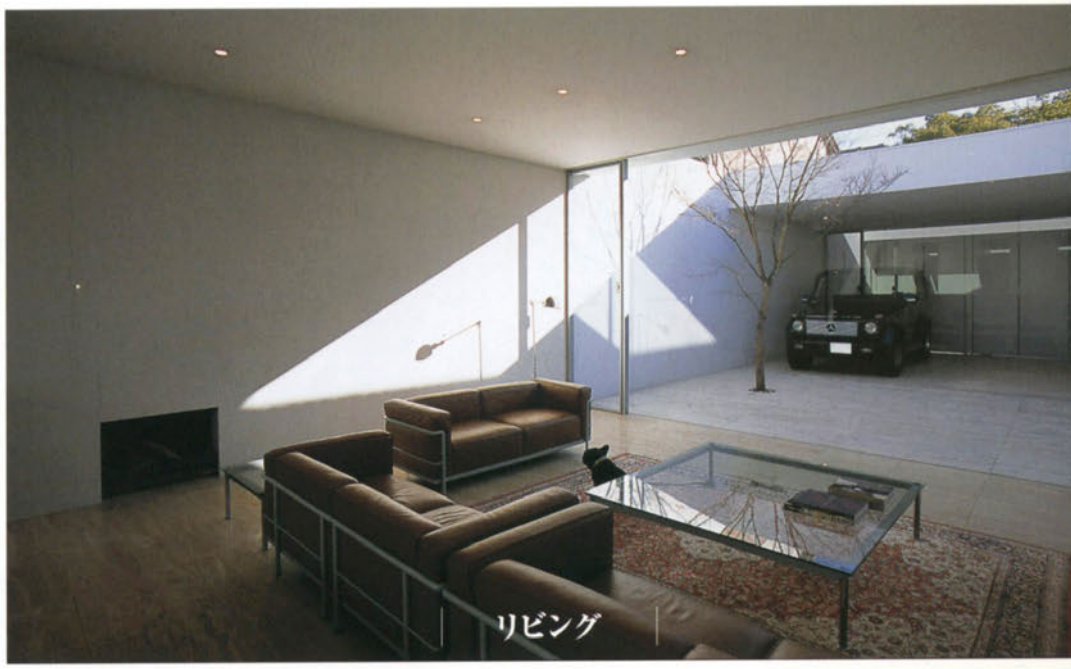
鈴木　そうすると、今までの建築家は、いわゆる地場の専門家、この町の専門店という感じだったけれど、これからはあるタイプの専門店だと。うちの料理は全国どこでも召し上がっていただけます、という感じの建築家が出てくる。そういう特化の仕方、そういう広がり方というのが、これからはありえるんでしょうね。

小川　そうですね。事務所をどこに置くかは、それほど問題ではなくなってくるように思います。

屋根

コート1

写真上／伊勢砂利を敷き詰めた屋根。壁　庇の上端にステンレスのアングルを仕込み、シャープな輪郭を見せる。ご主人はこの景色を眺めるため、ガラス張り茶室の設置を検討中。右上／モミジの植えられたコート1。左手の室内と同じ600㎜角のトラバーチンが敷かれており、右手のガレージへと連続する。右中／リビングの天井高は3mで、コート1の南面した開口からは刻々と角度を変えて自然光が射し込む。フィックス部分は19㎜厚の透明ガラス。ガラスドアのフレーム、サッシのマリオン材は、25㎜×75㎜のスチール　フラットバー。室内は全面に床暖房が施されている。


リビング

周辺風景

右下／左手の収納天端、右手のカウンター幕板の天端、ともに天井高の1/2である1,500㎜に揃えられている。開口の内側にはそれぞれロールスクリーンが組み込まれた。写真上／建物北側には堤防を挟んで財田川が流れ、自然豊かな環境に立っている。

キッチン

外観正面

アプローチ側からの夕景。アルミ製フラッシュ戸は8枚が電動折戸となっており、開くと36m先の主寝室の壁までを見通せる。下は折戸を閉じたところで、高さ3.6m、幅10mのマットな仕上げの塊となる。

主寝室

植栽の施されたコート越しに見る、主寝室の夕景。奥の壁面は、70㎜の段差の下に埋め込まれた間接照明とダウンライトにより、やわらかくライティングされている。

コート2 プール

写真上／約70㎝の深さがあり、6～9月はお子さんが毎日使用しているという。中／2匹のフレンチブルドッグのためのシャワー付きの部屋。フロストガラスの向こうは小さなコート。下／バスルームの奥のシャワーコーナーは外部空間となっており、上部からの自然光が得られる。

ドッグルーム

バスルーム

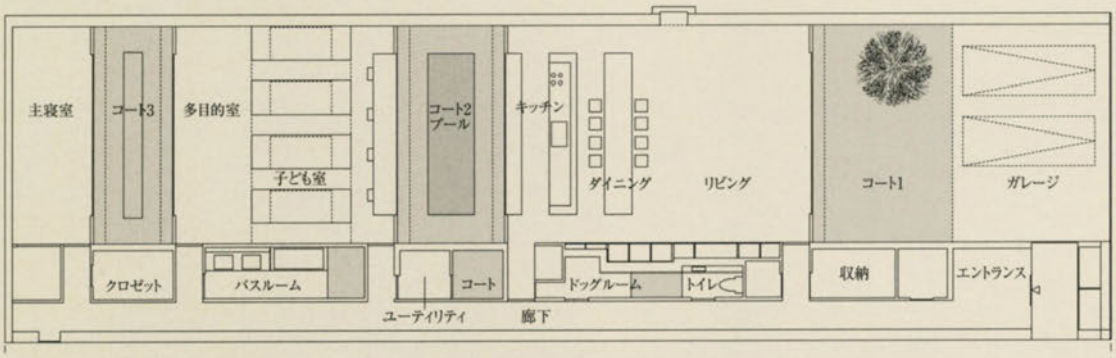
子ども室

写真右／子ども室のユニットは、上段にエアコンと収納、中段にベッド、下段に収納。前後の、側面に重なっている引き戸を閉じると、プライバシーも守られる。左／勉強のためのスペース。4人が並ぶテーブルは長さ5,270㎜。天板は10㎜厚のコーリアン。

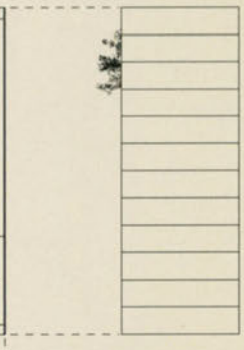
[36M HOUSE]

0 2 4m

[平面図]

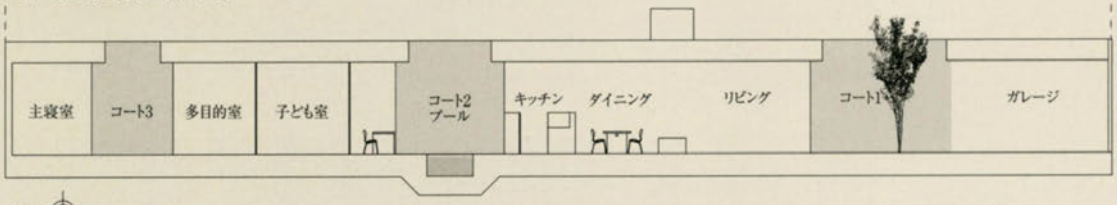


[南立面図]



36m

[南北断面図]



1/250

N

データ

建築概要	
所在地	香川県観音寺市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども4人
	+ペット2匹(フレンチブルドック)
設計　監理	小川晋一／
	小川晋一都市建築設計事務所
構造設計	和田建築技術研究所
施工	富士造型
構造	RC造
規模	地上1階
敷地面積	477.45㎡
建築面積	285.89㎡
延床面積	285.89㎡
設計期間	2006年1月～4月
施工期間	2006年10月～2007年4月

おもな外部仕上げ	
屋根	伊勢砂利3分敷き込み
	露出シート防水(外断熱工法)
外壁	RC部／外装用水性塗装
	コンクリートモルタル補修のうえ
	ファサード部／
	アルミ製フラッシュパネル
開口部	スチール製サッシ
	アルミ製サッシ
	アルミ製フラッシュ電動折戸
	シャッター
外構	伊勢砂利敷き込み
その他	コート床／トラバーチン600×600㎜
	張り撥水剤塗布

おもな内部仕上げ	
主室(ドッグルーム、バスルームをのぞく)	
床	トラバーチン600×600㎜張り
	撥水剤塗布
壁	PBt=12.5㎜　パテシゴキEP塗装
天井	PBt=9.5㎜　パテシゴキEP塗装
ドッグルーム　バスルーム	
床	セラミカ スーパータソス
	600×600㎜張り
	撥水剤塗布
壁	化粧ケイカル板t=6㎜張り
天井	化粧ケイカル板t=6㎜張り

ミニマルを成立させるディテール

ダウンライト

φ65㎜のスチールパイプをカットして天井に埋め込み、奥にハロゲン電球をセット。消灯時にもほとんどフレームが見えない。

床コンセント

トラバーチンの一部を150㎜角にカットし、コンセントを内蔵。指掛かりを兼ねた切り込みからコードを引き出す。

鋼製建具

中庭に面したガラスの引手(サムターンを内蔵)。FB-25×75㎜のフレームに取り付けられている。高さは天井高の1/2で1,500㎜。

写真(3点とも)提供＝小川晋一都市建築設計事務所

小川晋一その他の作品

Other Works

平面図からも
ミニマルな考え方が
みえてくる

[キュビストの家]

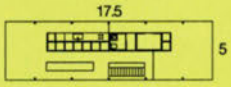
Cubist House

1989

[イソベスタジオ＆レジデンス]

Isobe Studio & Residence

1996



[アブストラクトの家]

ABSTRACT HOUSE

2002

[ロフトハウス]

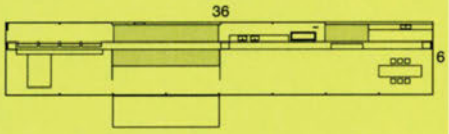
LOFT HOUSE

2004

[ワールド オブ カルバン クライン・ザ ハウス]

World of Calvin Klein・THE HOUSE

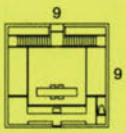
2007



[アイハウス]

I HOUSE

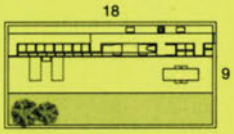
2009〜



[エヌハウス]

N HOUSE

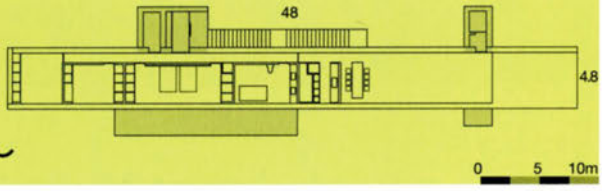
2009〜



[48m ハウス]

48M HOUSE

2009〜



1/650

異次元のスケールによるリラックスした生活

文／豊田正弘

Toyoda Masahiro

市

街地のはずれ、旧道からちょっと奥まったところに、濃いグレーに塗られた12枚の金属パネルが立ち並んでいる。思えば、その殺風景で端正なファサードから、建築家の描いたストーリーは始まっていたのだ。

正面を左にまわり込んでエントランスのドアを開けると、長大な廊下に対面する。真っ白な壁　天井と、600㎜角のトラバーチンの床。そこへ間隔をおいて射し込む自然光　人工光のグラデーションにより、パースは強調され、突然、美術館へ迷い込んだようなスケールに立ちすくむことになる。

そして最初の角を曲がりドアを開けると、白い光に満ちた、悠然としたスケールのリビング。フルハイトのサッシを通して、右にはガレージを含むコート、そして左にはコートと部屋が延々と重層し、視線が抜けていく。外部にまで連続する白い壁、トラバーチンの床からは、ストイックで静的なイメージを抱いていたが、じつは違う。当日は小雪が舞ったり快晴になったりという天気だったが、そうした自然の変化がダイレクトに空間に反映され、部屋は刻々と表情を変えていく。「白い光」には無限ともいえる種類があるのを知った。そしてその変化は当然、季節によっても大きな違いをもたらす。小川晋一さんによれば、コートにあるモミジの葉の有無で、またその緑の状態で、まったく違った雰囲気になるという。

また、ガラスのレイヤーは写真で想像するより、はるかに遠くまで視線を運んでくれる。子ども室脇の多目的室で建主のご夫妻からお話をうかがったのだが、ふとその肩越しに、30m先のガレージに停められた車が見えたりするのだ。

各部屋は廊下を介してゆるくつながっており、広大なワンルームともいえる。しかし、部屋と廊下を行き来するうち、そのたびに舞台の転換に立ち会っているような感覚を覚えた。そしてその根拠は、どうやら壁の「厚み」にあるらしいと気がついた。1　8mほどの幅をもつコアは、各種収納、バスルーム、トイレ、ドッグルームなど、多くの住機能を収めるだけでなく、この住宅の純粋性を成立させるのに大きな役割を果たしているようだ。

ご

夫妻は、以前から小川さんのファンで、価値観の近い方だと思って設計を依頼したという。4人のお子さんがいることから、子育ての場としての家であること、いわゆる「立派な家」はほしくないこと、掃除がしやすいこと、できれば平屋に、などなど、多くの要望が出された。そして、1回目のプレゼンテーション。プランを示す模型を見た途端、おふたりとも「絶対にこの案を変えたくない」と思われたそうだ。建築家と建主ご夫妻との、強靱な意志の持続により、結局、本当にそのとおり建ったというのには驚かされた。

「家族で生活していると、距離感がそれぞれうまくとれるんです。姿は見えるけれど声は聞こえないとか。姿を見せたくないときはブラインドを閉めたりして」というご主人。「すごく楽ですね。オープンな家なので、人を呼んでも苦にならない」と、奥さま。

絶対的な長さ　絶対的な広さのもつ「力」と、そのポテンシャルを最大限に生かした建築家の構想に、大いに感心させられた訪問となった。

1

1／東側全景。大きく量感のあるコンクリートの箱（アトリエ）の上に、鉄骨の住居部分が少しずれて載る。ずれた部分からアトリエに光が注ぐ。住居からは庇でトリミングされた海の景色が全面に広がる。

超えるとき

Miyamori Yoichiro

設計 宮森洋一郎

東に海を望み、西には山が連なる高台に立つアトリエと住まい。施主であるアーティストは、「何もデザインされていないところに住みたい」「完成しきらない状態で引き渡してほしい」と望まれた。要素がそぎ落とされたシンプルな箱は、まさに求められていたものであった。

取材・文＝加藤 純／写真＝傍島利浩

特集“ヒロシマミニマル”第2章　ケーススタディ

ミニマルを

Special Feature / Hiroshima Minimal Chapter

02
Case Study

Atelier in Tomonoura

作品名 **鞆の浦のアトリエ**

"Atelier in Tomonoura"

1階アトリエ

2／4mを超える天井高の1階アトリエ。正面の白い箱は下部に収納とトイレ、上部に湯わかしコーナーがある。3／左にトイレのある収納内部が見える。4／2の見返し。上部二辺をトップライトとし、制作に必要な10m近い壁面長を確保している。トップライトはポリスチレンフォームで断熱し、軒天ガラリで換気をとり結露対策としている。

3

2

4

大小ふたつの箱によるミニマルな空間

広島県福山駅から車で約20分。数々の歴史、また映画や小説の舞台として有名な、鞆の浦の海岸線に出る。山側へ延びる細く急な坂道を上ると、「鞆の浦のアトリエ」が姿を現した。正面から見ると、そびえ立つコンクリート打放しの壁が力強く感じられる。横から見ると、大きく量感のあるコンクリートの箱の上に、平べったい箱が海側にずらしてのせられたような格好をしている。下の箱が吹抜けをもつアトリエ、上の箱が住居スペースという構成である。

中に入っても構造体はことさら目立たず、シンプルな箱という印象に変わりない。プランニングはシンプルなもの。天井高が約4mのアトリエと、アトリエに付随するスペースが1・2階にあり、3階はすべて住居という構成。すべての階で、北側の5分の1ほどのスペースに機能的な要素がほぼ集約されている。各階をつなぐ階段のほか、1階では作品保管庫、2階は靴を脱ぐ場所でもあるオフィススペース、3階は住居用のトイレ・洗面・バスルームの水まわり空間。各階の残りのスペースではこうした機能的な空間が視界に入ってこないぶん、箱という印象が強まっている。

スペース同士の仕切りは、オフィススペースでアトリエとのあいだを分ける扉がある程度。住居スペースではキッチンが壁で仕切られてはいるが扉はなく、開口部がダイニングに向けてあけられ、ゆるやかに居室とつながっている。住居スペースはところどころでカーテンで仕切ることはできるが基本的にワンルームの空間である。

住居スペースはアトリエの天井高に慣れた目には低く感じるが、そのぶん水平方向へ視線が広がっていく。横長の窓はFIXガラスで、方立はごく限られた箇所にしか設けられていない。方立の見付け寸法も最小限に抑えられているので、海方向への視界は妨げられることがない。バスルームまでも同じように窓ガラスが連続している。

住居スペース全体にわたる横長のガラス窓は、キャンチレバーのように約1mせり出したコンクリートの窓台に固定されている。この出窓のような張り出しによって、近くに立つ家々の屋根面は視界からカットされ、海を中心とした光景となった。窓台は室内ではベンチとなり、窓ガラスを挟んだ室外では窓拭き用の足場となる。また、窓下の部分にはダクト用防虫網を転用した丸い開口が横一列に設けられ、それぞれに付けられたアルミ板では開き具合の調節ができる。ここで通風を確保することで、横長窓は眺望に特化したものとなった。

未完成のデザインされていない状態

設計者の宮森洋一郎さんは広島・呉出身で、広島の建築文化を牽引してきたひとりである。東京と大阪で組織事務所とアトリエ事務所に勤務後、実家の都合で広島に戻り自分の事務所を開設した。今から約27年前のことである。当時すでに一世代上の村上徹さんなどの建築家がいて、建築家が活躍できる素地はあった。大いに刺激を受けた宮森さんは当初、個性的で斬新な

5

3階住居スペース

6

5／3階リビング　ダイニングからの眺め。住居スペース全体にわたる横長窓はFIXガラスで、方立もごく限られた箇所にしかないので、海への視界がさえぎられることがない。この窓は、キャンチレバーのように約1m張り出したコンクリートの窓台に固定されている。窓台は500㎜の高さで、室内側ではベンチとして使用、室外では窓ふき用の足場となるとともに、近景をカットし、トリミングされた景色を獲得している。下部にはダクト用防虫網を使用した通風開口が隠されている。

9

8

7

6／テラスと寝室方向を見る。寝室上部の陳列レールを用いた細長い窓からは西の山と空を望むことができる。7／リビング　ダイニングよりガラスで覆われたテラスを見る。室内はカーテンで仕切ることができるが基本的にはワンルームの空間。8／ダイニンクより開口越しにキッチンを見る。9／バスルームまで同じ横長の窓が続く。

建物を設計しようという思いが強かったという。「つくろうとする行為にとって、敷地の条件や施主の要望は対立する項目のようであり、それらの折り合いをどのように付けていくかに苦労していた」と宮森さん。それが次第に前者を重んじるようになり、最近では、敷地条件や施主の要望を中心に据えているという。確かに作品によって建物の形状や素材の選定はバラエティ豊かであり、敷地条件や施主の好みによるところが大きいことが推察される。この建物がストイックな姿になっていることが不思議なくらいである。

理由のひとつには、建物の施主が現代絵画のアーティストであったことが挙げられる。海外で活動を続けていた小林正人さんは自身の結婚を機に、この土地で自身の制作活動の新たな拠点を構えることにした。所属ギャラリーから人づてで紹介された建築家が宮森さんであった。最初の要望は次のとおり。住居スペースとは別にアトリエがいること。アトリエは作品を守るためにRC造とすること。アトリエに必要な寸法は高さ約4m、長さは約10m。全体の予算は3000万円。「なんとかできるだろう」と宮森さんは判断し、設計を進めた。

自らの作品を生み出しつづけるアーティストの感性が、作品性の強い空間と合わないことは容易に想像できる。宮森さんは「完成しきらない状態で引き渡してほしい」と望まれた。何もデザインされていないところに住みたい、という要望である。要素がそぎ落とされたシンプルな箱は、まさに求められていたものであった。そしてこれは「単純・簡単・素朴」を目指すという、宮森さん本来の嗜好と合致したようだ。

無装飾でフラットな表現の獲得

かけられるコストはまず、2層分または3層分のコンクリート壁を精度よくつくり、ボリュームを確保することに集中されている。シンプルな形状で、スペース同士の間仕切りがほとんどないことは、コスト面での制約が大きく関係している。仕上げも、実際的で安価な素材や技法が使われた。たとえば、オフィススペースや住居スペースの床仕上げは全面ビニルタイル張りであるし、アトリエの床仕上げはモルタル金ゴテ押さえである。また、アトリエの天井は、断熱効果を期待して銀色の保冷シートが張られている。結果としてアトリエの床・壁・天井はすべて無彩色の素材に囲われ、抽象的な雰囲気が高いものとなっている。すべて白い素材で囲われた住居スペースも、抽象的な空気感の強いものである。

空間が抽象的になっているのは光の状態のためでもある。アトリエでは、作業の下地となる壁に大きな窓を付けるわけにもいかないので、西と南の壁に沿ってL字型にトップライトが設けられている。鉄骨の箱をのせる際に一辺を残して東側にずらし、その隙間をトップライトにしたのだ。その際、居住性を高めるためにペアガラスとすることが検討されたが、予算の関係で断念。シングルガラスの内側には、断熱性を高めるために白いポリスチレンフォームが張られた。このトップライトを通る光はやわらかく拡散し、アトリエの壁を伝いながら空間全体をぼうっと明るくする。住居スペースでも、横長窓から入る光はツヤのあるタイルや白い壁・天井に反射することで、影のないような浮遊感が生まれている。

このミニマルな空間は、敷地やコストなどの諸条件と制約、設計者と施主の嗜好といった数数のベクトルがすべてうまく揃い、産み落とされたものであるようだ。海に向かって立つふたつの箱の姿は、記号としてのミニマルの枠を越え、この場がさらに新しい刺激と創造の場になることを予感させるものとなっている。

"Atelier in Tomonoura"

2階オフィススペース+湯わかしコーナー

11

10

10／作品を見下ろすことのできる湯わかしコーナー。
11／オフィススペースからも海が望める。靴はここで脱ぐ。階段を上がると横長窓の展望が開ける住居スペース。

鞆の浦のアトリエ

"Atelier in Tomonoura"

北東からの全景。RC造の箱の上に鉄骨造の箱がせり出して載る。

データ

建築概要	
所在地	広島県福山市
主要用途	併用住宅(住宅+アトリエ)
設計	宮森洋一郎／宮森洋一郎建築設計室
構造設計	SAK構造設計
施工	井上建設
構造	鉄筋コンクリート造+鉄骨造
規模	地上3階
敷地面積	749.61㎡
建築面積	106.09㎡
延床面積	197.35㎡
設計期間	2006年2月～7月
工事期間	2006年8月～2007年2月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板t=0.4㎜ 立てハゼ葺き
外壁	炭入りコンクリート打放し
	ガルバリウム鋼板t=0.4㎜ 立てハゼ葺き
開口部	アルミサッシ
外構	栗石敷きt=100㎜
おもな内部仕上げ	
アトリエ	
床	モルタル金ゴテ押さえ
壁	炭入りコンクリート打放し
天井	保冷シート張り ポリスチレンフォームt=15㎜
オフィススペース	
床	ホモジニアスビニル床タイル
壁	炭入りコンクリート打放し
天井	炭入りコンクリート打放し
寝室・リビング・ダイニング・キッチン	
床	ホモジニアスビニル床タイル
壁	PBt=9.5㎜ AEP
天井	PBt=9.5㎜ AEP

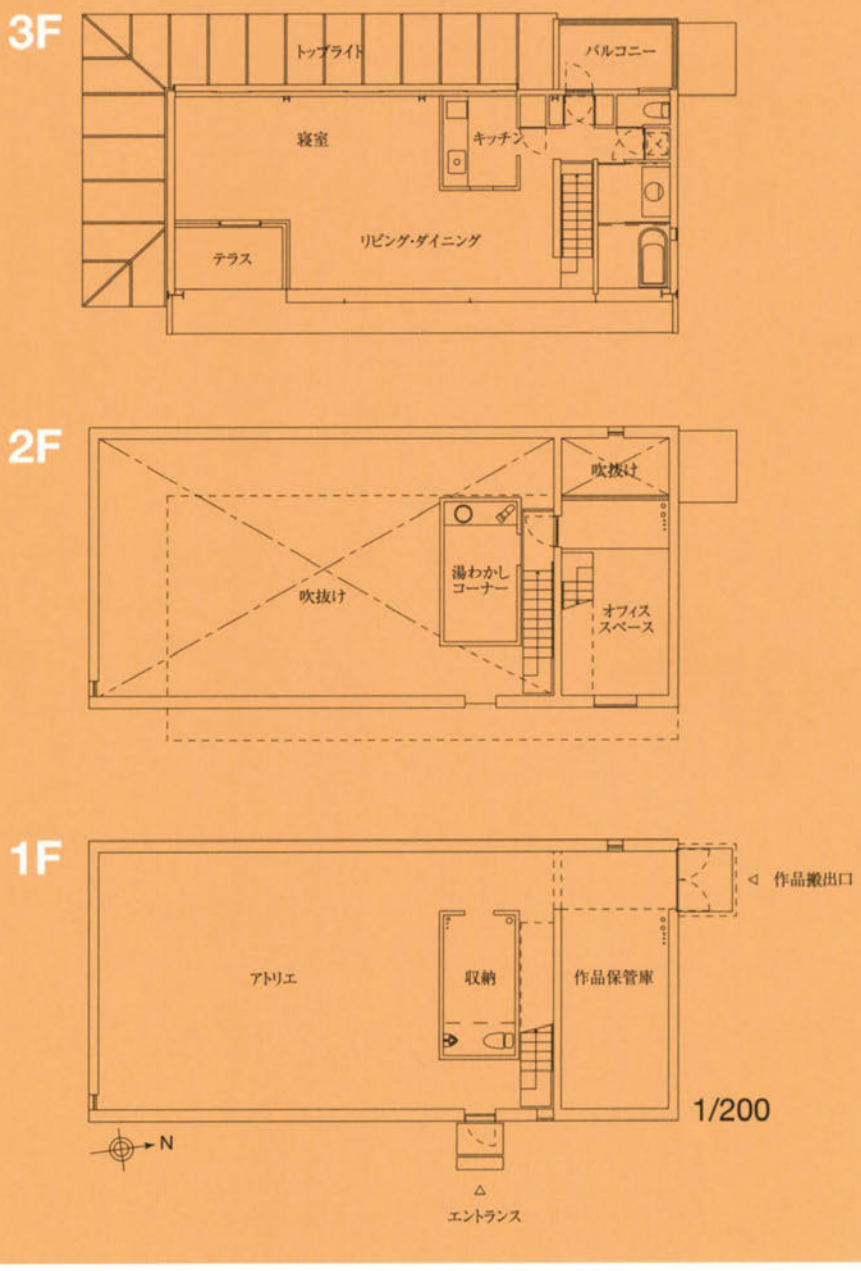
建築家

宮森洋一郎 Miyamori Yoichiro

1950年広島県生まれ。73年京都大学工学部建築学科卒業。75年同大学大学院修士課程修了。同年～78年東急設計コンサルタント、78～82年美建・設計事務所を経て、82年宮森洋一郎建築設計室設立。99年より広島工業大学環境学部非常勤講師。おもな受賞と作品＝95年「宮の町タウンハウス」(94) で第11回吉岡賞、99年「江波の家」(98) でひろしま建築文化賞大賞、2006年「RCC文化センター」(04) でひろしま建築文化賞大賞。

URL:www.h3.dion.ne.jp/~miyamori/

平面図



1

1／増築された和室。その壁に2点の家具がある。こちらは仏壇。存在感を消す銀の色。

特集“ヒロシマミニマル”第3章　ケーススタディ

出のミニマル再訪

Nishimiya Yoshiyuki

設計 西宮善幸

およそ20年も昔のことだ。この家を取材で訪れたのは。あざやかなシンプルさで印象に残っていた。壁の薄さ、あいまいな場の設定。あらためて思う。ミニマリズムの初期体験ではなかったか。変化はあるけれど内部に入ると初期のイメージは変わらない。一貫したコンセプトの流れはみごとだった。

取材・文=中原 洋／写真=傍島利浩

2

2／こちらは収納用タンス。いずれも把手を消し、ディテールを消した細心のデザインを見てとれる。

思い

Special Feature / Hiroshima Minimal Chapter

03
Case Study

Yakeyama House + Annex

作品名 焼山の家＋アネックス

1階広間

4／既存のリビングと増築の和室は扉を開けはなてば一室空間。5／20年前とこの風景はほとんど変わっていない。キッチンを隠す可動式のパネルはあの時代のデザインといえるかもしれないけれど、みごと20年を生きている。住み手の愛着の結果だといえるだろう。

既存家屋

増築和室

3／左手RC造が初期の形。中央が大きな和室。右の黒い壁は収納。収納があってシンプルな建築は完成するのでは。

"Yakeyama House + Annex"

1階和室

7

6

6／増築の和室。主寝室であり、アトリエとしても使われている場。ほとんど家具が置かれていないから場の特定ができない。それこそがミニマルかと思う。7／和室としてはややスケールオーバーかもしれないけれど、まるで道場のように見える空間、そこに広がる障子は美しい。

西宮善幸さんは広島出身、広島在住の建築家。村上徹建築設計事務所に10年在籍して独立した人だ。広島出身のミニマルな作風で知られる人といえば、まずは村上さんだろう。その事務所で10年だから影響を受けないわけはない。とはいえやはり空間のしつらえにどこか村上さんとは違うなと思えるところが、建築家としての作家性だろうか。

ミニマルという言葉がまだなかった

西宮さんの発表された作品は案外に少ない。「松山平田の家」(1989)、「焼山の家」(89・2000)、そしてコンペで設計した「三良坂町立灰塚小学校」(95)。

今回は焼山の家を取材した。写真を見ていただければ「ミニマル」のくくりにこの作品を収めることにそんなに反対の声は上がらないだろう。

じつはこの住宅は90年代の初頭に　般誌のために取材させてもらっている。そのときの新鮮な印象は頭の中から消えていない。しかし、当時、ミニマルという言葉はコミュニケーションワードとしてあったのだろうか。西宮さんと話し合っても、互いに「記憶がないね」ということに落ちついた。

モダンデザインは時代性をもたないと思ったことがあった。しかし、あれから数十年、60〜70年代のモダンデザインを基本とした建築を見ると、明らかに時代性を読み取ることができる。装飾性をはぎ取ったデザインといわれていながら、モダンデザイン自体、時代性をどこかに示しているところが不思議といえば不思議だと思う。まして名作として評価されてきた建築にはみごとなまでに時代というくくり、時代の表現を感じさせてくれることがある。すぐれたデザインとはそういうものではないかなとも思う。

ミニマルはそうしたモダンデザインのなかにありながら、ひときわデザイン性を拒否しているようにみえるけれど、30年の時間を経てみると明らかに2000年代のミニマルと見わけられるだけの何かを身にまとっているようだ。

ディテールの徹底と軽さ

20年前の焼山の家。何が記憶に残っているかといえば、まずはすばらしくシャープだった印象。四角い単純な箱、その上にのせられた片流れの屋根、浮き上がった屋根の下に開けられた光の取り込み口。庇も雨樋も消されている。

ローコスト住宅ではあるけれど、すみずみまで配慮されたディテールの積み上げが基本にある。そんなことを書くのも取材者としては、20年前のあのとき見えていなかったものがけっこうあるなという反省があるからだ。　般誌読者が対象だったから、ディテールを語ることは不要だったといえるかもしれないけれど、なぜこの家がそんなにも記憶に残っているのか。自問自答していた自分がいる。

通りから見た家の印象はかなり変わっていたといっていいかもしれない。前庭が消えていた。手前に増築があるから、その向こうの庭は見えない。増築部は波板で覆われている。1層の畳の大部屋の外壁は銀色の波板。手前に見える納戸部分は2層で用途の違いで黒に塗りわけられている。

薄いコンクリートがシャープさを描く

ただし玄関まわりに変化はない。これを眺めて気づく。屋根の薄さ、2階建てなのに1層に見まがうプロポーションの造り（そのために1階フロアは地面に掘りこまれている）。屋根と軀体のあいだに置かれたフロストグラス。軽さと薄さが印象をつくっている。

そのなかで、この家のシャープな造形をひときわ印象づけているデザインのポイントは、軀体コンクリートの薄さ。一応気づいていたのだけれど、壁厚、スラブ厚ともに150㎜、この薄さが、魅力の源ではないかと長年思い返していたことがどうやら確認できたと思う。この再確認が今回再訪の主眼。やはり思う。安心する。

整理整頓され、線を減らしたデザインに加えて、コンクリートの薄さが、形態のシンプルさを際立たせている。

もうひとつの確認事項は、あの薄さで構造的にコンクリートは成立するのかという点。あらためて西宮さんにぶつけたかった。恥ずかしながら20年前にはこのデザインと構造の基本が見えていなかったという反省もある。

このコンクリートの薄さの構造的な成立理由。答えは単純だった。「鉄筋を隙間が見えないほど入れてあります」。たぶん現在の建築基準法ではこの薄さは許されないかもしれないけれど、強度を維持するためにはその手があったかと納得した。建築家がひとつのイメージを通すとき、執着するイメージにこだわり、それを成立させるためにひそかに行う技術的な配慮のひとつがここにあったということ。一挙に納得した。

磨き上げられたミニマル感

2000年、この家は増築された。もう少し大きなアトリエスペースが必要になったからという理由と、もうひとつ、双子のお嬢さんたちの部屋への要望に応えるため。主寝室が子どもたちに譲られ、縁なし畳を中央に敷いた和風モダンの主寝室とアトリエ兼用の大きな部屋が庭先に増築された。付属する2階建ての納戸。そこには朝の混雑時のための家族用のトイレも設

8

2階寝室

2階和室とアトリエ

10

9

"Yakeyama House + Annex"

8／2階に上がったところにある畳サイドから。お子さんが成長途中で、階段に転落防止の柵が設けられて、目下多少の混乱はある。9／上の写真の見返し。浮いた天井がこの家の形、骨格をみごとに見せている。10／かつての主寝室。今はふたりのお子さんの寝室になっている部屋。

置されている。

その設計の基本姿勢はまったく変わっていないようにみえる。家具も置かれていないこの部屋はちょっと見たところではその用途を確定しにくい。

ミニマルな表現に過剰な生活用品の存在はいうなれば敵だろう。整理が行き届かないとミニマルな空間は生きてこないのは周知の事実だ。納戸は2階建てで、かなりの収納スペースが確保されている。中をのぞかせてもらったけれど、内部もまた整理整頓され、物の過剰は抑えられている。奇跡的な表現の継続がこの家にはある。とはいえここに暮らす家族のこの家への強い愛着がなかったらこうはなっていなかっただろう。施主の西垣さん　家の愛情が、この家の表現を今も守っている。

この増設された空間はおおらかだ。6・5m×3・5m。壁付けされたミニマルそのものの銀色の四角い箱。壁に取り付けられたこの箱、じつは仏壇。真四角。把手は小さくあけられた穴。ミニマルの基本言語だ。家具のデザインは、さらなる進歩を示しているというべきか、明確に意識化されたミニマリズムだ。西宮さんの変わらぬデザインへの姿勢はますます強固に確立されているというべきだろう。もうひとつの床置きの収納も同じようにデザインされている。素材はやさしい無垢材でデザイン言語も同じ。それ以外には何もない。玄関脇の空間と広間と名づけられたリビングに直接つながっている。開け放てば完全なワンルームになる。

あいまいさの魅力

西宮さんの発表されたプランを見るとおのおのの空間は、名前こそつけられているけれど、住み手の「使い方自由」が基本にある。この部屋は何に使うのか、図面だけ見てもはっきりしない「あいまい」なところがある。増設された部屋もそうだけれど、既存部分の2階に上がったところはどうにでも使える自由な空間。室名は設計者のサービスというだけではないかと勝手ながら思う。

少なくとも西宮さんのミニマリズムは突きつめていくと、空間設定は住み手側の自由にまかせるというセオリーが存在するのではないかと推測できる。西宮さん自身、「空間を『あいまい』にしておくことを意図している」と言う。

空間そのものを限定しないことは、もしかしたら西宮さんのミニマリズムを支えているもうひとつの基本的な欲求なのだといってもいいだろう。

つくり手は定義には無関心にちがいないけれど、こちらが勝手に西宮さんの設計手法をくくるとすれば、やはりこれは徹底したミニマリズムといえるだろう。

唯　例外は、リビングの庭に面したところ、ベンチ状に張り出したコンクリートの端の「はつり」にあるかもしれない。何かをするか、何もしないか。「悩んだ」と言うことだけれど、これはまさしく80年代の時代性の名残を示す美意識だろうか。ここにくっきりとした時代の表情を見てしまった。台所を隠す屏風状のパネルにも同じことがいえるかもしれない。

勝手ながら作品数の少ない西宮さんの新しいミニマリズムを見てみたい気がする。

11　1階トイレ

12　玄関

11／トイレには時の流れを感じない。12／エントランスの状況。入り口を入る瞬間の壁の薄さが後々この家の形、空間のありようをシャープに感じさせてくれる。

焼山の家+アネックス

Yakeyama House + Annex

プレキャストのコンクリート板を立てた塀の薄さの印象は強い。

データ

建築概要	
所在地	広島県呉市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計・監理	西宮善幸／西宮善幸建築設計事務所
構造設計	SAP建築構造設計室
施工	神垣組
構造・規模	地上2階
敷地面積	230.05㎡
建築面積	42.94㎡+35.28㎡(アネックス)
延床面積	80.58㎡+35.28㎡(アネックス)
設計期間	1987年9月～89年4月+
	1998年7月～98年12月(アネックス)
施工期間	1989年6月～10月+
	1999年2月～9月(アネックス)
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板t=0.4㎜立平葺き
外壁	化粧合板コンクリート打放しウエテキシS
開口部	アルミサッシ(シルバー)
おもな内部仕上げ	
居間・台所	床／ナラ縁甲板直張りワックス仕上げ
	壁・天井／化粧合板コンクリート打放し
寝室	床／ビニールタイルt=2㎜
	壁／化粧合板コンクリート打放し
	天井／有孔榀合板t=5.5㎜
	目透し張りVP
アネックス	床／畳敷き込み
	壁／PBt=12㎜3×8 AEP
	天井／化粧垂木AEP拭取り+PBt=9㎜AEP

建築家

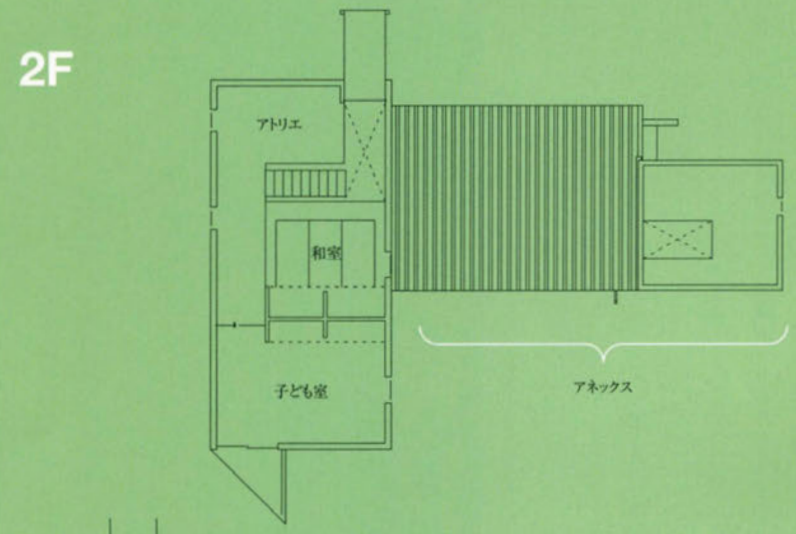
Nishimiya Yoshiyuki

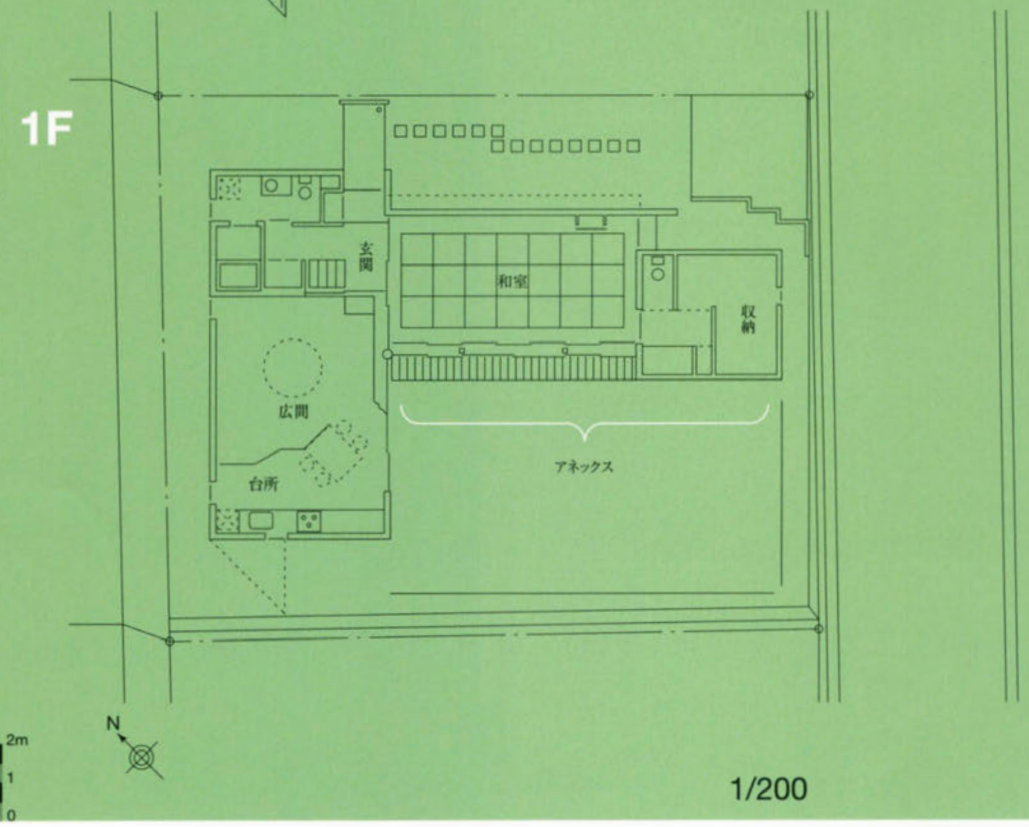
西宮善幸

1952年愛媛県生まれ。75年広島工業大学工学部建築学科卒業。76～85年村上徹建築設計事務所を経て、85年西宮善幸建築設計事務所設立。91年より近畿大学工学部、95年より広島工業大学非常勤講師、2006年より国立呉工業高等専門学校建築学科助教授、09年より同大学教授。おもな作品と受賞＝「三良坂町立灰塚小学校」(95／96年公立学校優良施設表彰グランプリ文部大臣奨励賞、97年日本建築学会作品選奨)、「勝山町保健福祉センター」(99／00年グッドデザイン賞、00年JCDデザイン賞奨励賞、01、02、04年日本建築学会作品撰集)。

URL:www.geocities.jp/nsmyaa/index.html

平面図





1/200

Tanijiri Makoto

設計 谷尻 誠

勢いよく活動する広島の若手建築家のひとり、谷尻誠さんの「大竹の家」を見る。新しい素材への挑戦が促されたというその家は、屋根、壁、天井、軒裏、テラス床のすべてに同一の船舶用の防水塗装を採用。ディテールが完全に消えてしまったその先にあるものは……。

取材　文=伊藤公文／写真=藤塚光政

消した後に

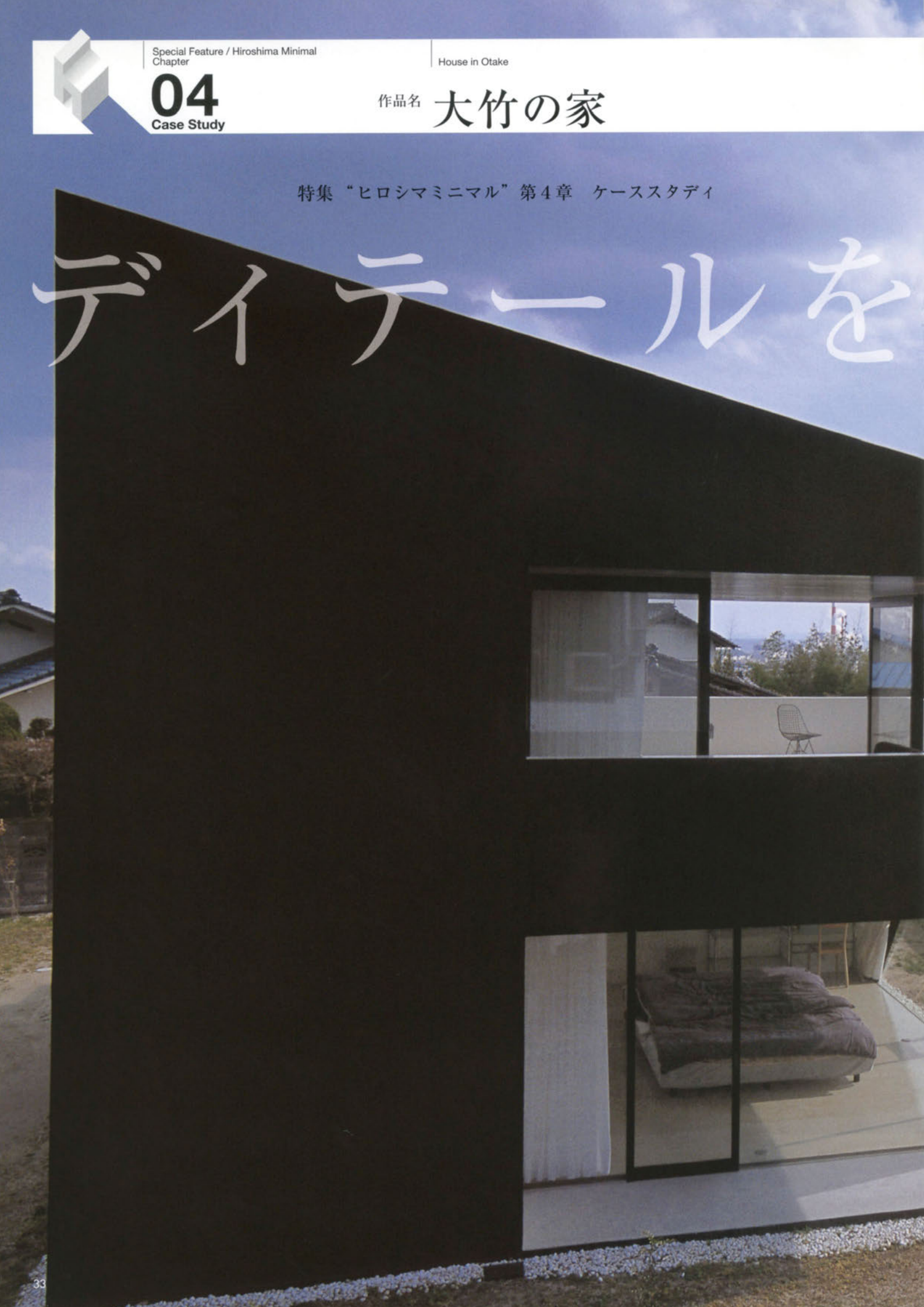
1

1／北側全景。南に工業地帯を見る。大きく張り出したキャンティレバーの先端に柱はない。1.8m間隔で片側ハウトラスを配置し、それらの上弦材、下弦材を水平ブレースでつなぎ、屋根を一体化している。

作品名 大竹の家

特集“ヒロシマミニマル”第4章　ケーススタディ

ディテールを



3

2

2階リビング+テラス

"House in Otake"

2　3／引き戸を開け放した状態のリビングとテラス。屋根を支える柱はない。庇の奥行は6m。

4

4／右手リビングとテラスのある開放的な南面は景色のなかに身を置く場、北面は閉じながら開く場として個室やダイニングキッチンを配し、遠くの景色を切り取るための横長のピクチャーウインドーが設けられた。

高く、遠くへ跳ぶ

分野を限らず、あらゆる創造的な作業に携わる者であれば、高く、遠くへ跳ぼうとする意志をもつことが重要だ。初めから低く、近くを目標とすれば、達成する可能性は増す。でも、うまくいったとしても、それだけのことでしかない。

高く、そして遠くへ。

とはいえ、言うは易く行うは難い。ことに建築設計の分野では。なぜならば建築の設計は、独力ではどうにもならず、多数の人々の支援、協力、理解を要するからであり、また他者の資金を安全かつ確実に運用する責任があるからであり、さらに広範な技術や技量を身につけなければならないからである。こうした数多の障害や制約を通り抜けるあいだに、気がつけば手近な着地点にたどり着き、そこを定位置に安住してしまう例は多い。

近年、ひとり立ちし、勢いよく活動する若手建築家が広島に目立つという。その理由は定かでないが、そのひとりである谷尻誠さんを例にとると、高く、遠くへ跳ぼうとする意思をもつに十分な引き金があり、またその意思を持続する環境を自らつくり出しているように思える。

引き金とは、広島を根拠地として作品をつくりつづけている先達が身近に存在することだ。彼らは、十分なデザイン力をもち、視線は高く、広島の、そして日本の枠を突き抜けて伸びている。教育者でもある彼らは、完成した谷尻さんの建物のよき審判者でもあるという。彼らの作風が大別すればミニマリズムの範疇にあることも、たぶんよい方向で作用している。個人住宅の規模である限り、表現の方向を　点に定め、純化させていくほうが、方法も結果も明快でわかりやすいからだ。

一方、意志を持続していける環境とは、第1には理解ある施主の存在である。これは住宅が完成するたびにオープンハウスを開催し、実物を見て確かめる機会を設けてきている谷尻さんの努力によるところが大きい。第2には施工者の存在である。若手建築家の設計意図を尊重し、それをフォローしつつ、定められたコストに収めて完成に導く施工者が、広島近辺にはまだいるのである。

これ以外にも理由はあるはずだが、いずれにしても、高く遠くへ跳ぼうとする意志をもつ若い人たちが多く出てきて、力強く大地を蹴り、空高く舞うのは、痛快であり、すばらしいことだ。

対比的な景観、対比的な開口

広島県の西端、山陽本線の大竹駅と玖波（くば）駅の中間に、亀居城址がある。1603年から5年がかりで築城されたが、故あって3年後には破却されてしまい、その後荒れるにまかされていたが、近年発掘調査が行われて立派な石垣が現れ、公園として整備され、春は桜の名所として親しまれている。瀬戸内の海岸からいきなり急峻な崖地となり、その頂、標高88m。まさに天然の要塞。今では埋め立てがなされてやや海から遠いが、それでも見晴らしはきく。その亀居城址の石垣の直下、尾根になっている場所が、谷尻さん設計の「大竹の家」（2007）の敷地である。

2階に上ると、築城から400年、いや源平の時代までさかのぼれば800年の歴史の変遷を凝縮したかのような、壮大にして奇妙なパノラマが眼前に広がる。すなわち、北に目をやると海峡の向かいに厳島（宮島）の意外に大きな山容がある。転じて南に向くと、近景には亀居城址の緑がせまり、その下の谷間には墓地が広がっているかと思えば、遠景の埋立地には石油関連製品の巨大工場の煙突が群れそびえて煙をたなびかせ、その向こうには海面が広がっている。前夜には雪が降ったとかで、外気は刺すように冷たいにもかかわらず、眼前のパノラマには全体に淡いヴェールがかかっていて、春の趣。

この2階がリビングダイニングで、北と南の対比的な景観に合わせ、まったく異種の開口が用意されている。落ち着いた景観の北側にはダイニングを配し、幅7m、高さ60cmのピクチャーウインドーを設けているが、反対に遮るもののないダイナミックな景観の南側には、深い庇をもつ広大なテラスに連続する、開放感あふれるリビングを配している。床、壁、天井、軒裏は内外とも白一色。建具、家具は黒一色。強すぎると思われるコントラストを、艶あり塗装の天井面からの反射光が空間全体を満たすことで中和している。

1階は玄関、浴室、寝室。2階の構成を反映して、北側は壁面で閉じ、開口部は極小とする一方、南側は思い切り開放的な空間としている。

5／ダイニングより北東のピクチャーウインドー（幅7m×高さ60cm）を見る。右手に見えるのは厳島。

"House in Otake"

2階ダイニング 5

8

1階スペース01

7

1階浴室

6

1階寝室

6／1階の寝室は2階の構成を反映して北側を閉じ、開口も極小の空間となっている。7／南東のコーナーにある浴室は天井から床までの全面ガラス張りで開放的。8／子どもたちの部屋となる予定のスペース01も南面全体がガラス張り。

南東のコーナーにある浴室さえも例外でなく、天井から床までの全面ガラス。割りきりがよい。

新しい素材への挑戦

このような南北でまったく対比的な空間構成を可能にしているのが、大胆な構造計画だ。北側に2列、幅（桁行）2・5mの間隔で柱を立て、そこから南側に6m近くも、2階床スラブと屋根を張り出している。キャンティレバー先端の垂直部材は1階に2本あるが、2階にはない。荷重が少なく、鉄骨造であるとしても驚きに値する。

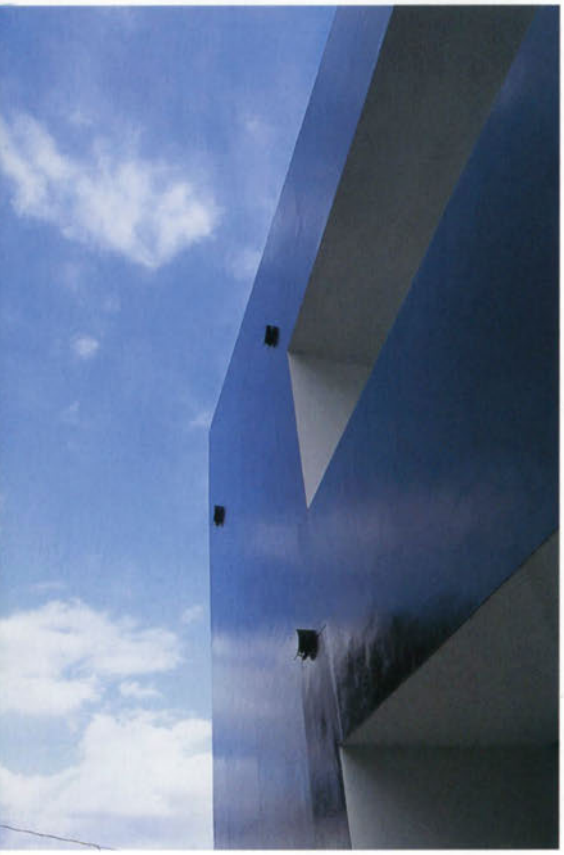
設計の要点のもうひとつが、屋根、内外の壁、天井、軒裏、テラス床の全面を覆う防水塗装（J・P・テックコート）である。船舶用の塗装で、耐候性に富み、変位追従性にきわめてすぐれている塗装とのこと。下地合板のサンドペーパー処理は大変だが、後はシームレスに塗りまわして終わり。防水はこの一層のみ。目地不要、端部も入隅部も特別な処理は不要。エッジがきいた形なのに、ディテールが完全に消えてしまう不思議。2階のテラスに出ると、まるで白い漆喰で塗りまわしたミコノスの家のよう。

当初、外壁はガルバリウム鋼板とする案が有力だったというが、勤務先で先端素材の扱いに通じている施主のほうから、新しい素材への挑戦が促されたという。たどり着いたのがこれまで建築には　度も使用されたことのない船舶用の塗装で、佐賀にある工場に何度か通って確認し、使用することにしたそうだ。その決断が、屋根の著しくシャープな形を可能にした。

この家にエアコン設備はない。冬はそれなりに寒く、夏はそれなりに暑い。住まいにも寒暖があって当然、自然の気候とともに生きていることを実感できるのが大切と施主は言う。谷尻さんは、この点を含めて、問題を隠したり先送りしたりせず、何事も施主と話し合い、徹底的な意思の疎通を図ったという。「施主にとって家を建てるのは人生の一大事。信頼し、何事も相談できる人でないと設計をまかせようという気にならないだろう。それは設計者にとっても同じ。多くの時間を費やし、全力でやるのだから、この人のためならやろうと思えなければ、設計できない」。こうした関係がある限り、立ち現れる制約や障害は決してプロジェクトの進行を阻害せず、むしろ適切な解を見出す重要なきっかけを与えてくれるという。そこからシンプルでありながら合理的で、なお思いもかけない魅力を伴う解が引き出されてゆく。だから谷尻さんの設計した建物は、表面的には一定のスタイルに収まらず、大きな振幅を見せて止まないのである。

9

10



9／1階南面の開口は110度の斜めFIXガラス張り。10／黒い船舶用防水塗料で塗られた外壁。吸排気口も同じ塗料で塗られ、存在を消している。

大竹の家

"House in Otake"

西側から見た全景。

データ

建築概要	
所在地	広島県大竹市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども3人
設計・監理	谷尻誠／SUPPOSE DESIGN OFFICE
構造設計	オーノJAPAN
施工	ホームテック
構造	鉄骨造
規模	地上2階
敷地面積	372.63㎡
建築面積	56.99㎡
延床面積	103.21㎡
設計期間	2005年5月～2007年5月
施工期間	2007年6月～12月
おもな外部仕上げ	
屋根・外壁	J.P.テックコート
開口部	アルミサッシ 木製サッシ
テラス	J.P.テックコート
おもな内部仕上げ	
リビング・ダイニング・キッチン	
床	長尺シート
壁	ビニルクロス張り
天井	J.P.テックコート
寝室・スペース01・スペース02	
床	モルタル金ゴテ押さえUCL
壁・天井	ビニルクロス張り
浴室・洗面	
床・壁・天井	J.P.テックコート

建築家

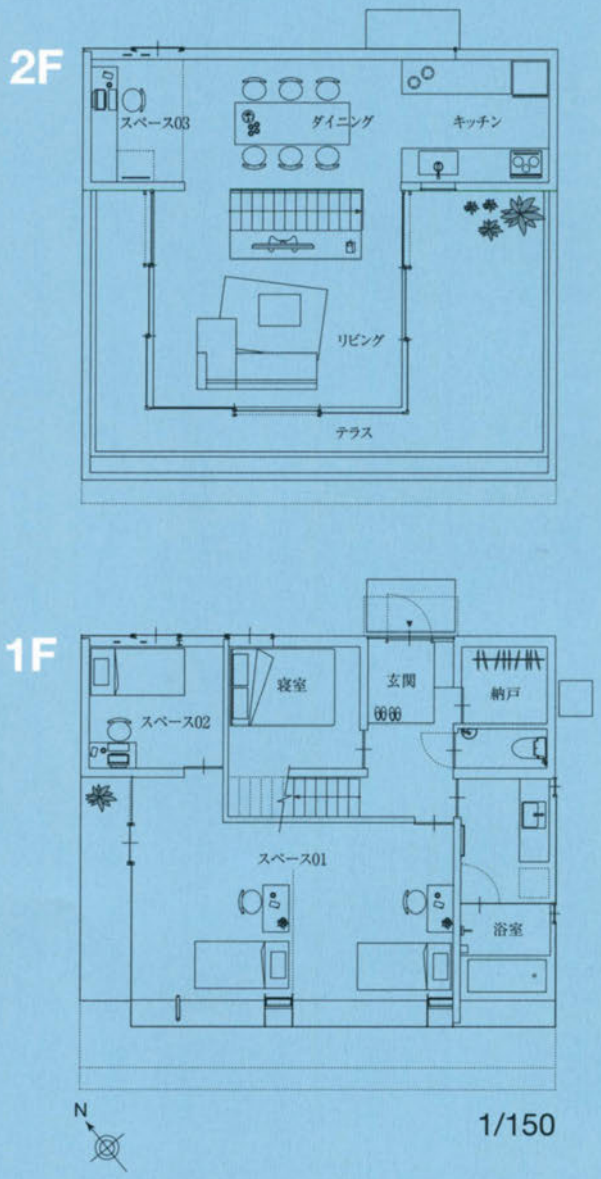
Tanijiri Makoto

谷尻 誠

1974年広島県生まれ。94年穴吹デザイン専門学校建築学科卒業。94～99年本兼建築設計事務所、99～2000年HAL建築工房を経て、00年建築設計事務所SUPPOSE DESIGN OFFICE設立。穴吹デザイン専門学校非常勤講師。おもな作品＝「Float」(03) で03年JCDデザインアワード新人賞、「畳沙門の家」(03) で03年GOOD DESIGN賞、「クラブカメリア」(05) で05年JCDデザインアワード入選、「cafe la miell」(07) で07年JCDデザインアワード入選など。

URL:www.suppose.jp

平面図



文 スケッチ

旅のバスルーム／浦 一也

第74回 スイス ヴァルス ホテル・テルメ・ヴァルス

ピーター・ズントー（＊1）の作品をまとめて見る機会があった。

2007年竣工の「野のチャペル」。ドイツ・アイフェル地方のヴァーヒェンドルフにある。

雪が残る朝、野原の小高い丘を目指して歩いた。凍てつく地面を踏む音と自分の呼吸だけが聞こえる。

隠修士ブルーダー・クラウスのチャペルを自分たちの野原にも、とばかり、地主夫婦がズントーに設計を依頼して自分たちでつくってしまったという。112本の丸太を立て、そのまわりに24回、版築（＊2）のようなコンクリートを自分たちで打ち、内部で3週間火を焚いてから丸太を外した。

工事に2年を費やしたという高さ12mの壁がモノリスのようにそこにある。1軸の鋼製三角扉を入り、鉛を流した床を歩く。暗くせまい。ブロンズの頭部彫刻がかろうじて見える。壁のたくさんの穴を埋めた吹きガラスや黒いがさがさの壁を触り、眼の形をした天空を見上げる。数日前は雪が天空から舞って床に積もったそうで、それは美しかっただろうと思う。

不覚にも涙が出そうだ。

ここには何もなく寒いが、温かく、立ち去り難い。奇もてらいもなく、心だけがつくらせた天然物のような人工物。この地球上にこんなものがあるとは。

野のチャペル

感動も覚めやらぬその2日後、転落しそうな雪の山道を駆け上がり、あの温泉保養施設（＊3）に入った。かろうじてブルーモーメント（＊4）の時間に間に合い、雪山がシルエットになるまで少しぬるいお湯の中にいた。

穴があくほど何度も見た図面を確かめるように歩きまわる。積み重ねた石の色、水中照明の静かな光、滑らない床、低い水音、湿った空気……。

身体を拭いてホテルの部屋に戻る。いわゆるズントールーム、改装です。

白と黒だけのシンプルなもの。塗床にカーペットが一部敷いてある。ベッドサイドのランプが壁を照らす。天井は最上階のせいか窓側が少し高い。雪が積もってバルコニーは使えなかったが、いい季節には外に出たくなるだろう。備え付けのCDを選び、ガウンのままでゆっくり。ワードローブはなくハンガーをかけるパイプのみ。ソファとテーブルはアイリーン・グレイ（＊5）のデザイン。ライティングデスクは華奢すぎる。

音楽を聴いていると時間が消える。

テルメ（温泉）があるからバスタブはあまり使われないだろう。洗面棚は小さすぎる。自分のスパ化粧品やツールを持ってくる人が多いから。

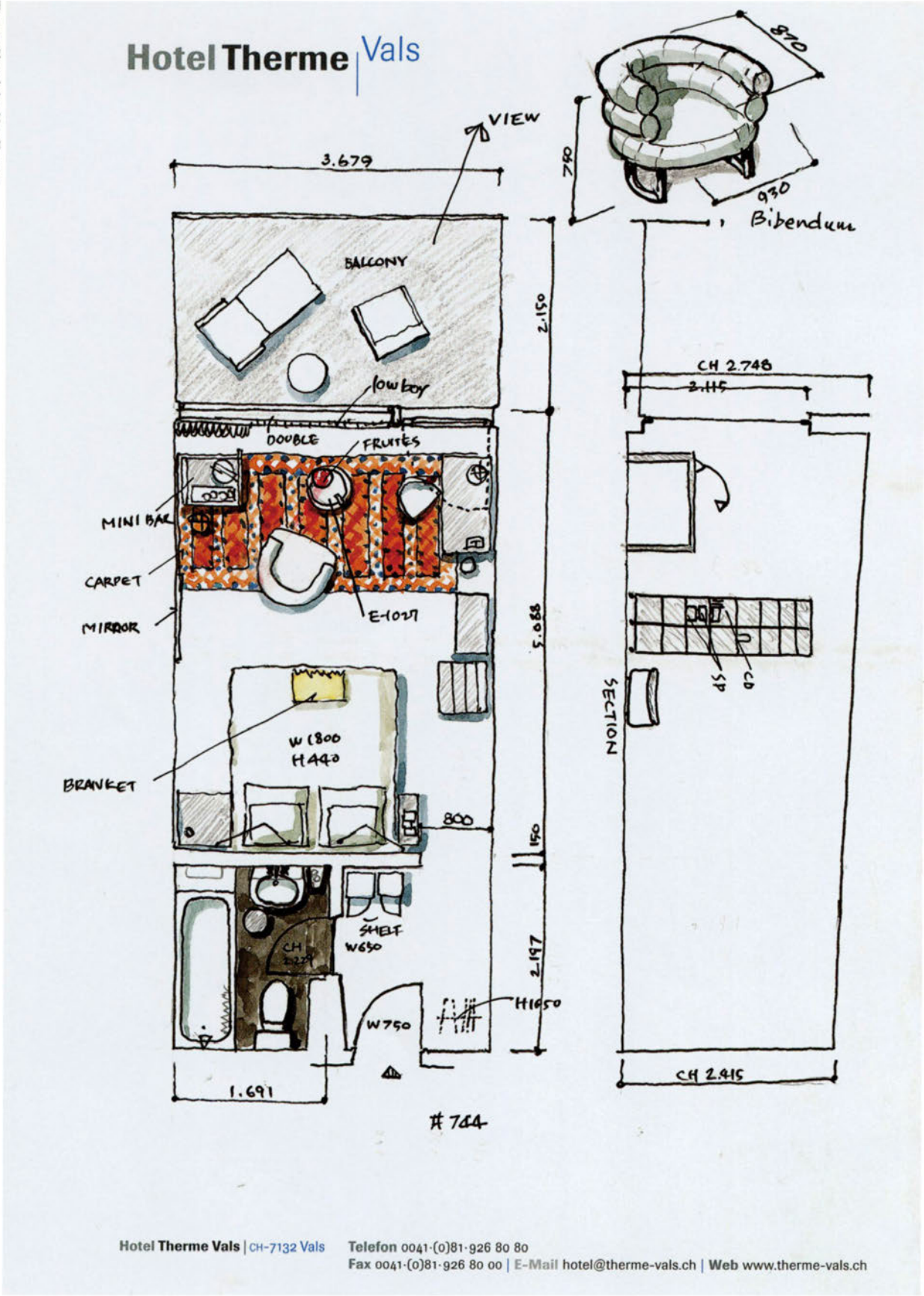
そうだ、あのスパですれ違った女性にロビーでもう一度会えないだろうか。服を着る。隠修士には到底なれそうもない。

＊1／Peter Zumthor（1943－） スイス、バーゼル生まれの建築家。スイスを中心にその設計活動は話題になるが寡作。2008年高松宮殿下記念世界文化賞受賞。
＊2／版築 中国や日本で古く土塀や基壇に使われた工法。型枠に土やにがり、小石などを入れて突き固める。
＊3／ヴァルスの温泉施設／Therme Vals（1996） 建築家ピーター ズントー設計の温泉施設。海抜1200mの地に30℃のお湯が出ることから温泉地となった地に、新たにつくられた施設。
＊4／ブルーモーメント 日没直後の短時間に、あたり一面が青一色に包まれる現象。
＊5／Eileen Gray（1878－1976） アイルランド生まれのデザイナー、建築家。ル コルビュジエのパートナーとなる。

ズントールームは白と黒

うら かずや／建築家 インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99年日建スペースデザイン代表取締役。おもな作品＝「ロテル ドロテル」(88)、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」(91)、「飯綱山荘」(91)、「ホテルモリノ新百合丘」(97)、「メディアージュ」(2000)。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍 光文社）がある。

Text & Sketch by Ura Kazuya



Hotel Therme Vals | CH-7132 Vals Telefon 0041·(0)81·926 80 80
Fax 0041·(0)81·926 80 00 | E-Mail hotel@therme-vals.ch | Web www.therme-vals.ch

白黒だけの小さなバスルーム

Hotel Therme Vals

Add／ 7132 Vals/GR
Tel／ +41 (0)81 926 80 80 Fax／ +41 (0)81 926 80 00
E-mail／ hotel@therme-vals.ch
URL／ www.therme-vals.ch
＊季節営業（2009年6月13日～2010年4月5日は営業）
Room Charges (Temporaries)／ Single €157～ Double €266～
1€＝137.61円（2009年3月24日現在）

2009
↓

［テラス］ 2　　1 ［東側全景］

自然に帰る家

1970
↓

5／1970年竣工のこの小さな家からすべては始まった。その後、増築を重ね、家は家族とともに成長していく。家のまわりの緑も成長していく。人と環境がともに成長した日本では稀有な住まいである（写真5＝鈴木 悠）。

5

「新座の家I」 設計／益子義弘

Masuko Yoshihiro × Fujimori Terunobu

1／現在の東側全景。2／81年の増築の際につくったブドウ棚が夏には庇の替わりとなって日陰をつくる。奥に増築部分寝室が見える。3／寝室と庭方向を見る。テラスの向こうに「新座の家Ⅱ」が見える。4／玄関のある西側全景。

4 ［西側全景］

3 ［寝室］

現代住宅併走

連載 第十一回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu, Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二

9

10

現代住宅併走

Masuko Yoshihiro × Fujimori Terunobu

6

6／98年増築部分。書斎から主寝室を見る。7／庭の斜面に置かれたシイタケの榾木。木曾の奥村昭雄先生のところから来たものだという。8／庭先の小鳥用のエサ台。9／日のあたる食堂の出窓。

8

7

10／益子さんは木造の吉村順三先生ゆずりの名手として知られるが、なぜか真壁はしない。独立柱も好まない。柱材が見えることで生まれる先験的秩序がきらいなのではないかとの自己分析なのだが、例外的に1本槐（エンジュ）の独立柱が中央に見えている。隠すわけにいかない事情があったのだ。

埼玉から東京に向かって伸びる狭山丘陵が平地に向かって迫り出したちょうど突端の斜面に、益子邸はある。開口一番、益子義弘さんのあいさつは、「藤森さんが取材に来るなんて、思いもよらなかった」。確かにこのシリーズはこれまで、トンガッタ住宅ばかり取り上げてきたし、日頃私の付き合う建築家も、トンガリ命。

でも私には、トンガリとは別にもうひとつテーマがあって、自然との関係の問題である。自然と親しみながら暮らす建築家の住まいには長いこと着目してきて、そのナンバーワンは名古屋の津端修一夫妻（創草期の公団住宅で活躍）。羊まで飼って、ホームスパンを楽しんでおられる。そして、近年、庭に来る小鳥についての文を読んで、益子義弘・昭子夫妻の住まいに関心をもったのだった。もちろん、益子さんが建築家としては、吉村順三の流れを汲むことはよく知っていたし、住宅以外の代表作の「杉の森の火葬場」（1995）も見ている。でも、住宅は初めて。

斜面を少し登って敷地に入ると、立木の根元にシイタケの榾木が転がっている。立木の上方には巣箱。シジュウカラが毎年、巣をかけ、昨年は蛇にも襲われず5羽巣立ったという。エサ台には、私が見たときにはメジロとシジュウカラとヒヨドリが訪れていたが、夏にはコゲラも来るそうだ。コゲラは珍しい。

12

11／台所から食堂を見る。
12／天井はやや低く感じられるが、このやや低感が、住宅ならではの独特の落ち着きを生む。

11

敷地を歩き、建物の中をあれこれ見せていただき、感取されるこの〝自然さ〟の正体はなんなんだろうと考えた。建物自体も、建物と外の樹や草や敷地との関係も、素直というかシックリなじんでいるというか、自然な感じなのだ。大きな人工物であるはずの建築と、神サマがつくったともいわれる自然物が、呼吸を合わせて息づいている。

益子さんの設計信条は、〝住宅はトンガッテはいけない〟〝主役は生活〟。確かにトンガリは平面からディテール、色彩まで、寸分も見当たらない。具体的に住宅作品についていうと、シンボリックな造形はしていないし、木造なのにシンボリックな柱は　本もない。例外的に、増築のおり父の田舎から贈られた銘木エンジュの柱が目立たないように一本あるだけ。使わないわけにはいかなかったんだろう。そもそも、日本の木造というのに柱を見せず大壁になっている。

日本の建築家の木造住宅、とりわけそのインテリアからいつ柱が消えたかに建築史家として関心があって注意しているのだが、開祖ともいうべき藤井厚二、堀口捨己、吉田五十八にもレーモンドにもあった。戦後では清家清にも篠原男にもあった。とくに篠原は柱のシンボリックな扱いで知られた。吉村順三はと見ると、使ったり使わなかったりしている。

そして益子義弘は　切、使わない。なぜか。

「場のイメージから空間をふくらましていき、柱梁のような強い秩序をもった骨格から決めるつもりはありません。感覚的に線材は印象が強すぎる」

私なんか、柱のシンボリズムをどう回復するのかばっかり考えてきたが、正反対なのだ。確かに「藤森さんが取材に来るなんて」状態。

こうした益子さんの信条に加えてこの家のたたずまいの〝自然さ〟は、70年の建設以来、75年、81年、98年と4回も増改築を重ねてきたことと深く関係あるのはすでに指摘されているとおり。吉村順三の自邸もこれ以上の増改築を繰り返して今のたたずまいに至ったことはよく知られている。

シンボリック柱命（いのち）の建築史家兼建築家はここで考えた。考えざるをえなかった。なんで私はここにいるのか。

ソウダ、ソウナノダ。建築家としての私には、デビュー作を手がけたときからの命題があった。いかに白井晟一のようにならずにすむか。白井の作品に強く強く引かれながら、そのクササには辟易し、なぜ臭うのか、どうしたらクササが消えるのかをずっと考えてきた。

近代の建築は、社会的習慣や文化的伝統の側からではなく、建築家個我の内側からつくられるのが原則で、その結果、個我が本質的にはらむクササが臭い出るときがある。強い表現か否かは無関係で、強くても、個我とは何か別のものに深いところでつながっていると、臭わないらしい。ガウディやライトのように。

でも、多くの場合、強い分だけ臭う。原因は生き方や人柄に行きつくが、ニオイを元から断つのは難しいから、私は薄める方法を編み出し、実践してきた。それは簡単で、深夜などにひとりで盛り上がって形を決めた後、数日して、他人の目で見返してみる。するとニオイがわかって嫌になり、やり直すのである。

ソウダ、こういう私的方法とは別に、普遍的方法がこの家で発見できるのではないか。増改築。ソウナノダ。増改築は、個我のクササを超える働きをしてくれる。

増改築とは、言い方をかえると、時間の経過である。竣工した住宅を、その後、長年月にわたって襲うさまざまな状況の変化。幾星霜。物質でいうなら風化。

そうした時間に巧みに対応するなかから、〝自然さ〟が生まれるのではないか。〝自然さ〟とは、人工物たる建築が周囲の自然と良好な関係をつくったときに、初めて生まれる印象にほかならない。とすると、

〝時間は自然と密通しているのではないか〟

おそらく、増改築の秘密はそこにあるのだ。疑う人は、益子邸を訪れてほしい。

新座のアトリエ

14

13

15

13、14／別棟アトリエの製図室。天井を抑えているから、視線と意識が外へと自然と流れ出ていく。ライト→レーモンド→吉村→益子とつづくテイスト。15／アトリエのキッチン。中央の白い柱はOMソーラー用の空調管。

現代住宅併走

Masuko Yoshihiro × Fujimori Terunobu

益子義弘

Masuko Yoshihiro

ますこ よしひろ／1940年、東京に生まれ、東京藝術大学に学び、吉村順三に師事。吉村の理想とした〝すなお〟な表現を引き継ぎ、いくつもの名住宅を手がけている。吉村は師のレーモンドから設備の充実を受け継いでいるが、この芸大建築の設備、環境技術を重視する意外な伝統は、吉村順三→奥村昭雄→益子義弘と流れている。益子は奥村の開発したOMソーラーのよき理解者として知られ、いくつかの作品を実現している。現在は芸大教授を退き、益子アトリエを主宰。

藤森照信

Fujimori Terunobu

ふじもり てるのぶ／建築史家。東京大学生産技術研究所教授。建築家。著書に『明治の東京計画』（岩波書店 毎日出版文化賞）、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房 日本デザイン文化賞 サントリー学芸賞）、『藤森照信の原・現代住宅再見〈1～3〉』（TOTO出版）。建築作品に「神長官守矢史料館」（91）、「タンポポハウス」（95）、「赤瀬川原平邸（ニラハウス）」（97 日本芸術大賞）、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000・日本建築学会作品賞）、「高過庵」（04）、「ラムネ温泉館」（05）などがある。

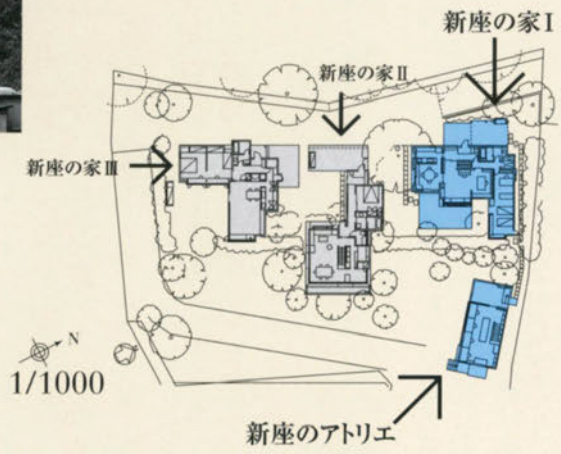
新座の家

図面提供／益子義弘

写真=鈴木 悠

右上に「新座の家Ⅰ」、
中央上に「新座の家Ⅱ」、
その左に「新座の家Ⅲ」
が見える。

全体配置図



0　10　20m

建築概要

所在地	埼玉県新座市
設計　監理	益子義弘+益子昭子
規模	それぞれ2,000㎡の一部

新座の家Ⅰ

主要用途	専用住宅
施工	広佐藤工務店(新築時)、 水野建設(81年増築時)、幹建設(98年増築時)
構造	木造在来工法
規模	地上2階
建築面積	107.60㎡
延床面積	134.32㎡
設計期間	1969年4月～12月(新築時) 1997年8月～1998年4月(増築時)
工事期間	1969年12月～1970年3月(新築時) 1981年4月～6月(増築時) 1998年4月～9月(増築時)

新座のアトリエ

主要用途	アトリエ
施工	幹建設
構造	鉄筋コンクリート壁式構造+木造在来工法
規模	地下1階、地上1階
建築面積	34.2㎡
延床面積	66.6㎡
設計期間	1997年8月～1998年3月
工事期間	1998年3月～6月

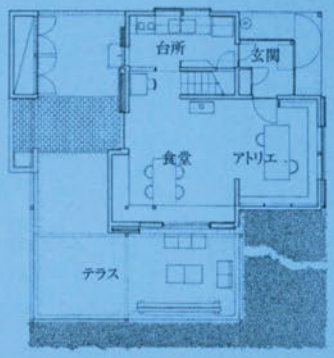
新座の家Ⅰ 平面図

写真＝益子義弘

竣工したばかりの「新座の家Ⅰ」が
赤土の台地に立つ。

新築時

2F

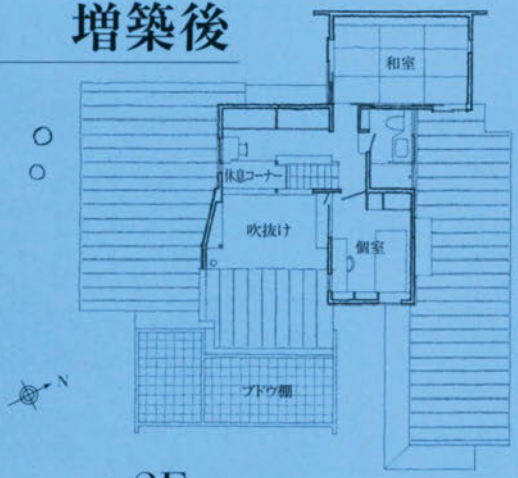


1F

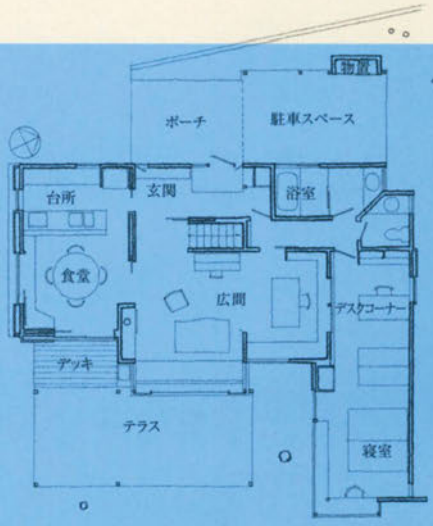
1/250

正面に「新座の家Ⅰ」、
右手前にアトリエが見える。

増築後



2F



1F

1/250

0　2　4m

福岡のマーケットに愛着を実らせる

代表取締役社長
畑中 直さん

クルーカット、やや細めのメガネ、茶のツイードジャケット、ボタンダウンのワイシャツ、グレーのパンツ。全体の雰囲気は「デザイン業界の人のよう」。それが畑中直さんの第一印象。瞬、設計出身かなと思う。じつは上智大学文学部社会福祉学科卒。身体があまり丈夫でなかった弟さんの面倒をみられる人になりたいとその進路を決めていた。その思い、価値観が畑中さんの風貌をつくりあげているように見える。

父上の了解を得たうえでの進路だった。だが日本の社会福祉事業の動きに違和感を感じて、父上の会社を手伝うことにした。当時、不動産業界で年商100億円をあげていた父上は、大いに喜ばれたらしい。けれど、仕事の手法は違った。反発もした。辞表を出すこと2度3度。そのうえに見舞われた1993年のバブル崩壊。父上の会社のスタッフを引き受けて、新たな会社「健康住宅株式会社」を創業した。

畑中 直（はたなか すなお）／1959年福岡県生まれ。83年上智大学文学部社会福祉学科卒業。大手マンションメーカーの営業を経て、福岡で父の経営する不動産会社に就職。98年健康住宅㈱設立。2001年オリジナル外断熱工法の「あんみん工法」が「次世代省エネルギー基準住宅評定」を取得（九州で3社目）。07年性能表示基準の「温熱環境4等級型式認定」を取得（九州初）。著書に『性能の良い外断熱の本』（PHP出版）。

6カ月ごとの継続点検

創業者としての畑中さんの会社は、ある意味、父上の会社を「反面教師としている」と言う。そのセオリーのひとつが「建築条件付き土地販売をしない。やれば儲かるのはわかっているけれど、その道はとらない」。

注文住宅の建築に特化した。「大きな金儲けはできないかもしれないけれど、バブルの一の舞いはしたくない」。と同時に「つくる喜び、顧客に心底喜んでもらえる喜びがある道を選んだ」。商売は嫌いなのではない。「ビジネスはゲームのようなところがある。努力がみのり、売り上げが上がっていくのは楽しい」と。ビジネスを楽しむ力もエネルギーになっている。

販売する住宅を徹底的に研究開発した。高断熱高気密。ただし、いわゆる高断熱高気密とは違う。外断熱工法による高性能住宅をすべて自分で検証し実験し、開発していったもの。どこのフランチャイズにも入らない。新しいビジネスモデルといえるだろう。さらに、6カ月ごとの継続点検。その家が存在する限り続ける。「不可能だ、つぶれるよ」という声をよそに徹底した。これが顧客の心をとらえた。

それが成功という結果につながっている。創業10年で年間90棟。26億円の売り上げ。今、財務の充実を図っている。「長い目線で仕事

写真上／健康住宅本社にて、畑中社長。下右／今回撮影したのは福岡市内ヒットマリナ通り住宅展示場内にあるモデルハウス。2階から中2階のリビング方向を見る。左手は書斎コーナー。下中／手前玄関と一体となる和室。家全体に空間のゆとりが生まれる。下左／広い中庭に面したダイニングキッチン。一部を吹抜けにして、開放感と落ち着き感を両立している。

地域に生きる会社 Volume 47

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

写真／山下恒徳

Kenkoh Jutaku Hatanaka Sunao

をしていきたいから」。注文住宅専門としては「健康住宅」はすでに福岡県内でトップグループ。わずか10年で強力な住宅会社に育て上げた。

理念だけの人ではない。一つひとつ積み上げている。たとえば毎朝のご近所掃除。社員50人全員で8時30分から15分間の掃除。「50人でやるとけっこう広く掃除ができます」と。8時50分から朝礼。「掃除はその場をきれいにし、その人の心をきれいにし、それを見ている人の心をきれいにする」という認識がある。

現在の住宅建築事業の先行きは決して明るいばかりではない。しかし「福岡はすばらしい」と言う。「九州新幹線も開通して九州経済圏は福岡に一極集中化してきている。こんなすばらしいマーケットはない」と。とはいえ「右肩上がりのマーケットはもはや期待できない」とも。「売り上げを伸ばすより財務体質を強固にすることが今大切なこと」という読みがある。無理がない、自然体の試みがここにはある。

自信を育てて

今、社員の営業志望が強い。売り上げが形になり、達成感が強いから。「口コミ、紹介が多く、健康住宅への顧客の信頼感、知名度が上がってきている」ことを社員が実感している。よりいっそう、自社の商品に対する絶対的な自信が育ってきている。確かにそれがある限り会社は伸びるだろう。

健康住宅が独自に開発した「外断熱工法」はますますその精度を高めているらしい。商品力にプラス、スタッフの総合力はこの会社の未来をさらなる発展へと導いている。

畑中さんが重視し大切にしていることはコミュニケーション。年に1回、社員一人ひとりと話し合う。「モチベーションを高めることが大事だ」という基本姿勢がある。その背景にあるのは、プランから始まって引き渡し前の最終チェックの立ちあいまで、「コミュニケーションの欠落が一番こわい」ということ。お客さまに対しても、社内でも。とはいえ「これは社員数50人が限界かなとも考えている」。今大事なのは幹部の育成。そこに目が向いている。

趣味を聞いた。「熱烈な福岡ソフトバンクホークスのファン」。強い愛着と情熱がある。子ども時代、父上に連れられて行った西鉄ライオンズの思い出も強烈。必死に反発した父上は今、心を許した人。時折元気な声を社員にかけにみえるという。

Data

Kenkoh Jutaku

健康住宅（株）

本社所在地	福岡県福岡市城南区別府5丁目25-21
電話	092(846)3000
代表取締役社長	畑中 直
会社設立	1998年
従業員数	50名
事業内容	外断熱工法による高性能住宅、自然素材住宅の設計 施工 管理およびそれに伴うアフターメンテナンス
売上高	26億8,700万円（2008年7月期）
URL	www.kenkoh-jutaku.co.jp

ヒットマリナ通り住宅展示場内モデルハウスのTOTO使用機器

浴室（浴槽）	ラフィア ニューウェーブ台付き 2ハンドル水栓
トイレ	ネオレストA1、ピュアレスト+ ウォシュレット アプリコット

写真上／モデルハウス正面外観。下／1階のトイレ。「ネオレストA1」が採用されている。

写真下右／2階の主寝室脇のトイレ。下左／バステラスから浴室内を見通す。奥の洗面室までレベル差なしでつながっている。風が通り抜ける空間。

Astrid Klein

Mark Dytham

[20 クラインダイサムアーキテクツの建築]

20 Klein Dytham architecture

西洋と東洋の文化・感性をうまく融合させた独自の視点を生かし、日本を拠点に活躍する外国人建築家、アストリッド・クライン氏とマーク・ダイサム氏。展覧会では両氏が「クラインダイサムアーキテクツ」をベースに築いてきた幅広い設計　デザイン活動を、「20」をナビゲーターとしたインスタレーションで紹介します。またTOTO出版から『-FUL クラインダイサムアーキテクツ Klein Dytham architecture』を同時発行します。あわせてご覧ください。

ブリラーレ
Brillare 2005

「リゾナーレ小淵沢」内に増築されたバンケット　ルーム。特徴的なフォルムが鏡面の外装によって周囲の風景と調和する。
(写真＝阿野太一)

ウィルソン・ハウス
Wilson House 2008

木立ちと川のある美しい風景に面して立つ房総半島の住宅。
(写真＝阿野太一)

もくもく湯
Moku Moku Yu 2006

山梨県のリゾート施設「リゾナーレ小淵沢」内の温浴施設。木々の重なりや大きな風呂桶をイメージした円形の空間が連なる。
(写真＝木田勝久)

東京で活動する理由

私たちアストリッド・クラインとマーク・ダイサムは1988年に初めて東京を訪れました。そのときから数えると昨年で20年、ここ日本の東京という都市に拠点を置き、建築家として活動を続けてきたことになります。

いわゆる日本の伝統的なよさに魅かれているというより、つねに何か新しいことが起こっている「東京」という都市で活動し、インスピレーションを受けつづけることが私たちにとって大切だと感じています。東京を拠点に過ごした20年間は、多くの人々と出会い、プロジェクトを通してさまざまな経験を得ることができたかけがえのない時間でした。東京で建築家として成人を迎えました。だから「クラインダイサムアーキテクツはどこの会社か」と尋ねられたら、「イギリスやイタリアの会社」でも「日本の会社」でもなく、「東京の会社」だと答えるでしょう。

「20」のマジック

経済やファッションは20年というサイクルで巡っています。日本では伊勢神宮の式年遷宮も20年に一度であり、また20歳で成人という人生での大きな節目を迎えます。また、私たちが主催するトーク・イベント「ぺちゃくちゃないと」(※)のために考えた「20スライド×20秒」というプレゼンテーション・フォーマットは、今や世界170以上の都市で展開され、これを通じて建築・デザインのネットワークが広がっています。

このように「20」という数字は社会的にも意味があり、そして私たちにとっても不思議な力を感じる数字です。ギャラリー・間から展覧会の話を受けたとき、この「20」をナビゲーターに何かおもしろいことができるのではないかと思ったのです。

サプライズ&スマイル

ヨーロッパ出身の私たちは、日本人にとっては日常的で気づかないことからもサプライズやスマ

文／クラインダイサムアーキテクツ

次回予告

アルベルト・カンポ・バエザ展

会期　2009年6月25日(木)～8月29日(土)
初来日講演会　6月26日(金)18:30～、津田ホール
参加方法　事前申込制
※詳細はギャラリー・間ウェブサイトをご覧ください。

巡回展

小嶋一浩+赤松佳珠子／CAt展 Cultivate

京都

会期　5月26日(火)～6月14日(日)
開館時間　10:30～18:30（最終日のみ10:30～17:00）
休館日　最終日以外の日曜日
会場　京都造形芸術大学ギャルリ オーブ
所在地　京都市左京区北白川瓜生山2-116 人間館1階
入場料　無料
お問い合わせ　京都造形芸術大学 環境デザイン学科
電話　075(791)9289
※5月29日(金)、講演会を併催いたします。

金沢

会期　6月17日(水)～6月29日(月)
開館時間　月～金曜日 9:00～19:00
土　日曜日 10:00～17:00
休館日　会期中無休
会場　金沢工業大学 ライブラリーセンター1階展示室
所在地　石川県石川郡野々市町扇が丘7-1
入場料　無料
お問い合わせ　金沢工業大学ライブラリーセンター
電話　076(246)2112
※詳細はギャラリー　間ウェブサイトをご覧ください。

ギャラリー・間

所在地　東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3階
電話　03(3402)1010
ファクス　03(3423)4085
開館時間　11:00～18:00（金曜日のみ11:00～19:00）
休館日　日曜日　月曜日　祝日および展示替え期間、年末年始
入場料　無料
アクセス
▶東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
▶都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分
▶東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分
▶東京メトロ銀座線　半蔵門線　都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

▶www.toto.co.jp/gallerma/

会期／4月8日(水)～6月6日(土)

クライン ダイサム アーキテクツ(Klein Dytham architecture)
アストリッド・クライン(1962年イタリア・バレーゼ生まれ)とマーク・ダイサム(1964年イギリス・ノーサンプトンシャー生まれ)は、共にロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで学んだ後、88年に来日、伊東豊雄建築設計事務所を経て、91年東京にてクライン ダイサム アーキテクツを設立。建築をはじめ、インテリア、インスタレーション、クリエイティブスペースの運営など幅広いデザインフィールドで、現在では世界をまたぐ活動を行う。日常にありふれているものにも驚きや楽しさといった独自の視点をプラスすることで建築・デザインに対しつねに新たな価値観を生み出しつづけている。

シン・デン
Sin Den 2007

都心の住宅密集地に立つヘア　サロン併設の住宅。ヘア　サロンのロゴマークをアレンジした線画が壁面に描かれる。
(写真＝阿野太一)

イルを発見することができますし、日本での活動が20年となった今ではヨーロッパでも新たな気づきがあります。気づきからアイデアを発展させることで、新しい価値観を生み出すのです。

私たちが来日した88年から、「クライン ダイサム アーキテクツ」として事務所を構えた91年は、日本がバブル経済から不況へと変わってゆく、まさに転換の時期でした。そして20年後の現在、100年に一度といわれる世界的な経済危機に直面しています。しかしきびしい時代だからこそ、たくさんの人々との大切な出会いをもたらしてくれる「建築」を通して、サプライズやスマイルのある豊かなライフをつくりつづけていきたいという決意を新たにしています。

ギャラリー・間でもサプライズとスマイルに満ちたアイデアで、私たちがこれまでに建築家として、デザインの境界線を引かずに手がけてきた幅広いプロジェクトを紹介します。ぜひ会場に足をお運びいただき、「20」という数字に導かれながら「クライン ダイサム アーキテクツの建築」に出会い、そこからみなさんのライフを豊かにする何かを発見していただければ幸いです。

※「ぺちゃくちゃないと」＝各プレゼンテーターがスライドを20枚ずつ、1枚当たり20秒で語るトーク　イベント。2003年2月20日20時20分、西麻布の「superdeluxe」で初回開催。現在では「superdeluxe」の月例イベントにとどまらず　世界170以上の都市で開催されている。

「丸の内トラストタワー本館」

MARUNOUCHI TRUST TOWER MAIN

取材 文＝大山直美 写真＝山下恒徳

進化を積み重ねたオフィスとトイレ

さまざまな大規模再開発事業が着々と進み、駅舎の復元工事も進行中の東京駅周辺にまたひとつ、新しい高層ビルが誕生した。駅の北側にあるJR東京駅日本橋口に隣接した「丸の内トラストタワー本館」がそれで、事業主は森トラスト。設計は安井建築設計事務所、戸田建設、森村設計が手がけた。

オフィス+ホテルの最新複合ビル

同ビルは2003年9月に先行して完成し、この連載でも紹介した「丸の内トラストタワーN館」(04年春号)の南側に増築部分として建設された、ツインタワーの第2期棟にあたる。しかし、19階建てのN館に対し、本館は37階建てで、延床面積もほぼ2倍。双子というよりは親子、しかも親の身長を大きく抜いた子どものようだが、これはN館竣工後に法整備が進んだ「都市再生特別地区」の都市計画決定を受け、容積率が大きく緩和されたためだ。この結果、オフィスだけでなく、高層部には国際的なビジネスサポートとしてのホテル機能も盛り込まれ、歩行者に開かれた敷地内通路や、防災上の避難場所ともなる広場・共用ホール・ガレリアなども整備。太陽光発電、風力発電、雨水利用など、環境負荷低減への取り組みも積極的に行っている。ちなみに、入居するホテルは香港に拠点をもつホテルグループ、シャングリ・ラの日本進出第一弾となる「シャングリ・ラ ホテル 東京」。全202室のうち、標準タイプの広さが50㎡というラグジュアリーホテルで、内装設計は世界の有名ホテルを手がけるデザイン事務所として知られる、アメリカのハーシュベドナー アソシエイツ。

残念ながら今回、ホテルは開業前で見学できなかったが、5年のあいだに最新オフィスとその水まわりはどう進化したのかを取材した。

オフィスにもあたたかみのある内装を

5年前にもN館の館内を案内してくださった森トラストの富岡聡さんに先導されて、まず向かったのはオフィスの最上階にあたる26階。基準階のプランを見ると、エレベータ、廊下、トイレといった共用部のコアを東側中央にまとめ、残るコの字形の巨大な整形無柱プレートを実現しているのはN館同様だが、富岡さんいわく、「ここは最上階なので天井高が3mと高いのですが、基準階でもN館より150㎜高い2950㎜、と同時にOAフロアも50㎜高い150㎜を確保しました」。床面積627

建物全景（写真提供＝森トラスト）。

MARUNOUCHI TRUST TOWER MAIN

男子トイレの小便器コーナー。左手大きな開口部から自然光が入る。小便器は、人体感知だけでなく尿の動きも検知する進化したマイクロ波センサーを内蔵。人が前に立つだけで水が流れたりすることがなく 超節水化が図られている。

MARUNOUCHI TRUST TOWER MAIN

オフィスからの風景

撮影した25階のオフィスフロアから、西側の東京駅、丸の内のビル群、皇居方向を見たところ。あいにくの雨だったが、立地のよさは実感できた。

オフィス基準階 男子トイレ

オフィス&共用スペース

ロビー

1階のオフィスロビー。木質系の内装材を多様するなど、落ち着いたあたたかみのあるたたずまいとなっている。

オフィス

オフィスは1フロア約627坪の整形無柱空間。写真の長辺方向は長さ83.5m、短辺は34.3m。天井高2,950㎜、OAフロア150㎜というゆとりのスペックを実現。

坪の広大なオフィスからは、皇居の緑を背にした丸の内の高層ビル群も、八重洲・日本橋のにぎやかな街並みも、みごとに一望できる。

次に、富岡さんが進化の第2ポイントとして挙げたのは、共用部の内装デザイン。N館ではモノトーンでシンプルなインテリアが印象的だったが、本館ではより高いグレード感が感じられる空間を目指したと語る。

全体の設計にあたった安井建築設計事務所の熊谷泰彦さんによれば、「たとえば、オフィスロビーやエレベータホールの壁面にはイタリア製のケースメントを挟み込んだファブリックガラスを用いたり、木質系の内装材を多用するなど、できるだけ自然に近い材料のやわらかな表情を出すようにしました」とのこと。こうしたあたたかみのある内装は、アースカラーを基調としたホテルのインテリアとも呼応し、連続性が出せたという。

変形を生かした快適トイレ

では、トイレ空間はどうだろうか。

N館と同じく、本館も共用部が東の開口部に面しているため、自然光が降り注ぐトイレが実現できるのは幸いだが、プランを見て気づくのは、共用部に占めるエレベータの面積。それもそのはず、ホテルとオフィスは動線を分ける必要があるうえ、オフィスが高層化したことでバンク数も増えている。しわ寄せは当然、トイレなどの共用スペースにおよぶわけだ。

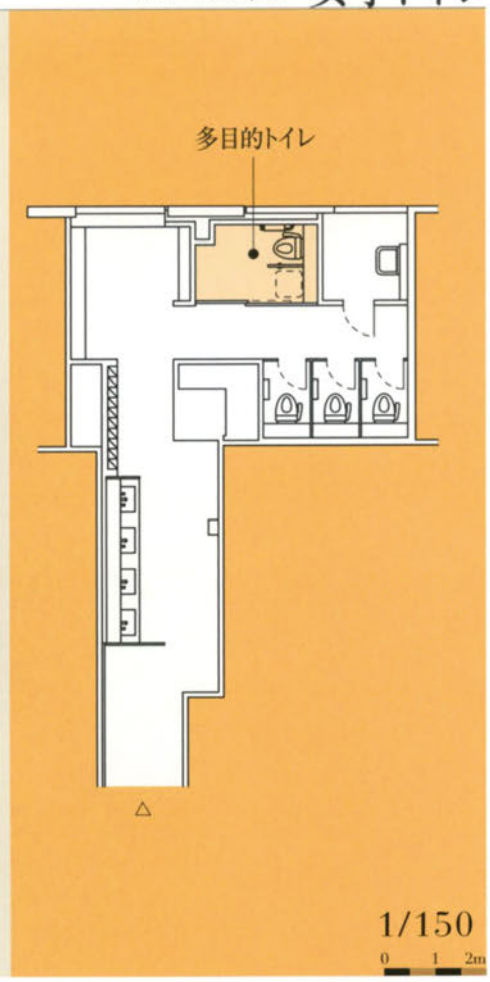
「いかに残りの隙間にトイレをうまく無駄なくレイアウトし、かつ外光を取り入れるかが課題でした」と熊谷さんが言うとおり、男女トイレとも、じつに細長く、しかも奥が鉤形に折れ曲がった変形スペースに配されている。

あまりウナギの寝床のようだと快適性も損なわれそうだが、実際に見ると、どのコーナーも違和感なく納まっており、狭さも感じられない。男女用とも廊下からしばらく同じカーペット仕上げの床が続き、途中から床材が変わってオープンなトイレがつながっており、一直線ではなく適度にクランクもあるため、あまり通路状という印象はせず、奥の鉤形の部分も適度なコーナー分けにひと役買っている。

とくに、N館に比べて快適性が増したのは女子トイレ。N館では手前が洗面コーナー、奥が大便器ブースという配置上、せっかくの奥の開口部からの光が洗面コーナーまでは届かなかったが、本館では鉤の手に曲がった右奥にブースを配置したので、洗面コーナーとは別に、東の窓際に専用のパウダーコーナーを設けることができたのだ。

もちろん、洗面コーナーも照明を仕込んだ縦のラインで鏡をうまく仕切って、ほどよい明かりで落ち着いて化粧ができるよ

オフィス基準階 女子トイレ



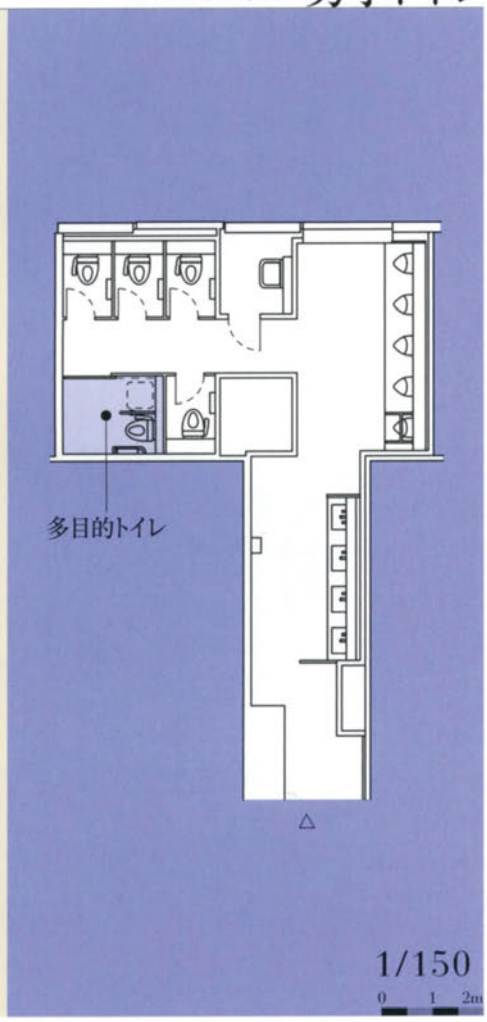
ブース

女子トイレの大便器は、センサーにより人体感知のみならず大小洗浄水量まで切り替えて節水を図っている。ちなみに、120秒以上座っていると大と判断する。

パウダーコーナー

写真左上／八重洲　日本橋側の開口部に面した、パウダーコーナー。左下／カウンター手前はエッジを持ち上げて、リップブラシなどがころがり落ちないように配慮（洗面カウンターも同様）。

オフィス基準階 男子トイレ



入り口

廊下から男子トイレ入り口を見る。10m程度奥に女子トイレの入り口がある。

車いす対応

男女ともに洗面カウンターの1カ所（入り口側）は、車いすでアプローチできるように下部フロントパネルを凹ませている。

全景

入り口側から見た女子トイレ全景。フローリングの床が、男子トイレとは異なるあたたかな雰囲気。個別収納ボックスの奥の窓側にパウダーコーナー。

MARUNOUCHI TRUST TOWER MAIN

全景

入り口側から見通す。男女トイレともに、建物全体の計画のなかでいかにして無駄なくレイアウトし、かつ外光を取り入れるかが課題だったという。

多目的トイレ

多目的トイレは独立させずに、男女トイレの大便器ブースのうちのひとつを広くして設けている。写真左手はフィッティングボード。男子トイレでは珍しい。冠婚葬祭時などの着替えを配慮。

洗面カウンター

4つの水栓のうち、1カ所は停電時などの対応として手動水栓を採用（写真左手）。また、自動水栓はすべて湯水切り替え式（写真右手の四角いパネル）。幅広いニーズに対応している。

う配慮しており、パウダーコーナーとしても十分使える。洗面カウンターには 段高いドライエリアを設けた、TOTOのツインデッキカウンターを採用。棚に置いた荷物がぬれる心配がないうえ、奥行きが浅いので、より鏡に近づいて化粧できる。「限られた空間では、省スペースになる点も魅力でしたね」と富岡さん。

多目的トイレを一般トイレ内に

方、「森トラストの女性社員の方にモックアップをご覧いただいて、ヒアリングの結果をもとに、カウンターの高さを下げたり、リッププラシがころがらないようにカウンターのエッジを少し持ち上げたりと、ディテールには気を配ったんですよ」と振り返るのは、オフィスエリアのトイレの設計を担当した戸田建設の伊礼朋次さん。やはりオフィスのトイレを考える際、女性の意見は重要なようだ。

また、女子トイレで目を引くのは床材。コーティングを施した木のフローリングのおかげで、ビル全体の内装にも通じるあたたかな空間に仕上がっている。さらに、N館同様、テナントオフィスビルでは今も珍しい個別収納ボックスを設置している点も注目に値する。

シャングリ・ラ ホテル 東京／プレミアルーム

ゲストルームは全202室で、写真は68㎡の「プレミアルーム」(写真提供＝シャングリ ラ ホテル 東京)。

もうひとつ見逃せないのは、男女トイレとも、大便器ブースのうちのひとつが車いすでも入れる広さを確保している点。多目的トイレが別にあるオフィスはよくあるが、介助者を要するほどではない人にとっては、わざわざ別のトイレに行くより、一般のトイレ内のブースで用が足せるほうがうれしいという話はよく聞く。これも 歩進んだユニバーサルデザインの見本といえるだろう。

小さな進化を積み重ね、1棟ごとにステップアップを続ける森トラスト。次なる進化に期待したい。

Irei Tomotsugu

伊礼朋次

戸田建設
建設設計統轄部
計画設計部
計画第1グループ

Kumagai Yasuhiko

熊谷泰彦

安井建築設計事務所
東京事務所
設計部
設計主事

Tomioka Satoshi

富岡 聡

森トラスト
コンストラクション
マネジメント部
建築課課長

丸の内トラストタワー本館

MARUNOUCHI TRUST TOWER MAIN

全体概要

所在地	東京都千代田区丸の内1-8-3
主要用途	オフィス(3〜26階)、 ホテル(27〜37階)、店舗(2階)
事業主	森トラスト
設計	安井建築設計事務所、 戸田建設、森村設計
施工	(建築)戸田建設、(電気)きんでん (空調)三機工業、(衛生)三建設備工業
敷地面積	12,026.77㎡(本館 N館合計)
建築面積	3,318.31㎡(本館のみ)
延床面積	115,379.68㎡(本館のみ)
階数	地下4階、地上37階、塔屋2階
構造	鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、 制震構造
設計期間	2004年1月〜2006年2月
施工期間	2006年2月〜2008年11月
URL	www.mori-trust.co.jp/marunouchi/

ホテル概要

名称	シャングリ ラ ホテル 東京
開業	2009年3月2日
運営	シャングリ ラ ホテルズ&リゾーツ
デザイン	ハーシュ ベドナー アソシエイツ
デザインコーディネーター/内装監理	観光企画設計社
総客室数	202
URL	www.shangri-la.com/jp

おもなTOTO使用機器

オフィス基準階

●男子トイレ	
大便器ユニット	壁掛フチなしトルネード便器 CU470P
	センサースイッチ式FV
	TES26特+TEF86+TES23
	ウォシュレット TCF581MR特
	棚式2連紙巻器 YH60M
小便器ユニット	マイクロ波センサー壁掛ストール小便器
	UU500+TN124-4+EMWU1AR
洗面器ユニット	はめ込角形洗面器 L520
	アクアオート(自動水栓)
	湯水切替スイッチ付 TEL121特
	横水栓 TL120A・壁付サーモ TL45X
	湯ぽっと20L タイプ REW20C2CN特
	オートソープディスペンサー TES142M
●女子トイレ	
大便器ユニット	壁掛フチなしトルネード便器 CU470P
	センサースイッチ式FV
	TES26特+TEF86+TES23
	ウォシュレット TCF581WR特
	棚式2連紙巻器 YH60M
洗面器ユニット	はめ込角形洗面器 L520
	アクアオート(自動水栓)
	湯水切替スイッチ付 TEL121特
	横水栓 TL120A 壁付サーモ TL45X
	湯ぽっと20L タイプ REW20C2CN特
	オートソープディスペンサー TES142M

ホテル／ゲストルーム

トイレ	大便器=ローシルエット一体形便器
	CES987特
バスルーム	ユニットバスルーム EBE1822特
	1700サイズいものホーロー浴槽
	FBY1710CP特

www toto.co.jp

TOTOの最新情報

TOTO news 1

2009年3月

世界最大のトレードショー ドイツ「ISH」に初出展

広大な広さのISH会場内部。TOTOの掲げるテーマは「CLEAN TECHNOLOGY SINCE1917」

会場前の様子

TOTOはドイツ・フランクフルトにて3月に開催した世界最大のトレードショー「ISH（International Sanitary and Heating）」に水まわり総合メーカーとして日本より初出展しました。「ISH」は2年に　度開催される、衛生・厨房・空調をテーマとした唯一の国際見本市。58以上の国と地域から2,400もの出展者を数え、この分野の革新技術と最新トレンドが集結する華やかなイベントです。TOTOは、2008年に欧州における事業拠点として、統括会社「TOTO Europe GmbH」をデュッセルドルフに設立し、本展示会出展を契機に総合水まわりメーカーとして欧州で本格稼動します。

ウォシュレットをはじめ、環境にもやさしい独自の洗浄技術・節水技術を生かし、衛生陶器、洗面器、浴槽、水栓金具まで、水まわりをトータルコーディネートできる総合力のあるブランドとして、日本発の新しいバスルーム文化をお届けしていきたいと考えています。

ISHでは3つの新シリーズ、約150点の商品を発表。出展企業の商品から選定される「DESIGN+（デザインプラス）」賞をNEOREST SERIES/LEのウォシュレット一体型壁掛トイレが受賞しました。

▸ ISH

会期	3月10日（火）～14日（土）
会場	ドイツ　フランクフルト国際見本市会場
出展者数	2,374社（2007年度実績） ドイツ国内／1,121社 ドイツ以外／1,253社
来場者数	217,864人（2007年度実績） ドイツ国内／166,230人 ドイツ以外／51,634人
出展面積	164,059㎡（2007年度実績）
主催	Messe Frankfurt Exhibition GmbH
URL	http://ish.messefrankfurt.com/frankfurt/en/

「TOTO Europe GmbH」URL ▸ http://eu.toto.com

www.cera.co.jp

セラのお知らせ

CERA TRADING

cera trading news

「CERA CATALOGUE 2009」を発行しました

セラトレーディングでは、2009年度の新商品を掲載した「CERA CATALOGUE 2009」を発行しました。
スイス・ラウフェン社のアシンメトリーなバスタブ「パロンパコレクション」やイタリア・ズケッティ社の水栓「FR」、たたずまいが美しい水栓「AGUABLU（アグアブル）」など、スタイルのある商品を多数ご用意しております。
カタログのご請求は、セラトレーディングホームページ、または電話・ファクスにてお申し込みください。

「CERA CATALOGUE 2009」表紙

1F/B1F

［ セラトレーディング ］
●所在地／東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル1階　地下1階
●電話／03(3796)6151
●ファクス／03(3402)7185
●営業時間／10:00～18:00
●定休日／日曜日　祝日　夏期休暇・年末年始

TOTOの最新情報

TOTO

TOTO news 3

TOTO・DAIKEN・YKKAP「リモデルスタイルフェア'08－'09」を開催します

TOTO DAIKEN YKKAPのコラボレーションによる大規模イベント「リモデルスタイルフェア'08－'09」を、昨秋から今春にかけて、名古屋　岡山　金沢　大阪　福岡　札幌　東京の7大都市にて開催。これまで延べ5万5,000名を超えるご来場をいただいています。
3回目となる今回は「これからはグリーンリモデル。～暮らしも快適、地球も快適～」をテーマに、「地球温暖化への配慮」「暮らす人の健康への配慮」「住まいの長寿命への配慮」をベースとしたTDYならではの暮らし方をご提案します。今春には東京　札幌会場での開催を予定しておりますので、ぜひご来場ください。みなさまのご来場を心からお待ちしております。

▶ 東京会場
開催日時　4月28日(火)～29日(水　祝日)
会場　東京国際展示場
（東京ビッグサイト東1-3ホール）
▶ 札幌会場
開催日時　4月28日(火)～29日(水　祝日)
会場　札幌コンベンションセンター
▶ URL　http://re-model.jp/event_notice/remodelstyle2008/

大阪会場ブース

TOTO news 2

2009年「iF賞」でダブル受賞

TOTOの自動水栓・発電タイプ「アクアオートエコ」が「iF賞」のiFプロダクトデザイン賞とユニバーサルデザイン賞をダブル受賞しました。「iF賞」はインダストリアル　フォーラム・デザイン・ハノーバー（ドイツ）が主催する国際的なデザイン賞で、レッドドット・デザイン賞（ドイツ）、IDEA賞（アメリカ）と並び世界的に最も権威ある賞のひとつです。
また、「ネオレストハイブリッドシリーズ」「クリスタルボウル」「ルネッセ　シャワーバー」「ルネッセ・シングルレバー水栓」の4商品がiFプロダクトデザイン賞、「オートクリーンC」「アーチハンドル水栓」「天然木手すり（紙巻器一体型）」の3商品がユニバーサルデザイン賞をそれぞれ受賞しています。

アクアオートエコ
自動水栓・発電タイプ

「アクアオートエコ」はiFプロダクトデザイン賞とユニバーサルデザイン賞をダブル受賞。

ルネッセ・
シングルレバー水栓

iFプロダクトデザイン賞を受賞した4商品のうちのひとつ、「ルネッセ　シングルレバー水栓」。

「iF賞」URL▶http://www.ifdesign.de/

TOTO出版

book 1

書評

文／伊藤公文（建築評論家）

建築家としてのリートフェルト

ヘリット・トーマス・リートフェルトの名は一般のデザイン愛好者のあいだでもよく知られているが、それは椅子のデザイナーとしてだ。レッド&ブルー・チェアー、ジグザグ・チェアーほか数点の椅子。確かにそれらはきわめて独創的な形で、いっさいの模倣や亜流を許さない強烈なアイデンティティをもっているが、長い活動期間のなかで、100軒近くの住宅といくつかの美術館や学校建築を設計している建築家としてのリートフェルトは、デビュー作「シュレーダー邸」以外、ほとんど知られていない。そうした現状のゆがみは本書の刊行により、根本からあらためられるだろう。

ここには、デ　スティルの美学の体現者としてだけでなく、ローコスト化、プレファブ化に挑んだ実践者として、あるいは「節度という贅沢」のなかに幸せを見出そうと呼びかけた近代的な生活の唱導者としてのリートフェルトの、多様にして豊饒な世界が展開されている。撮り下ろされた写真、描き直された図面、丁寧なレイアウト、そして何よりも簡にして要を得た解説文。本書にかかわった人たちのリートフェルトへの深い理解と愛情が伝わってくる。また、小さな個人住宅が数十年あまりの月日を超えて大切に住まわれ、当時と同様に周辺環境が美しく保たれている事実を伝えることも本書の大きな役割にちがいない。

リートフェルトの建築

著者●奥佳弥
写真●キム・ズワルツ
体裁●B5判変型・ハードカバー・312ページ
定価●4,200円（本体価格4,000円+税）

book 2

新刊のお知らせ

手塚貴晴+手塚由比
建築カタログ2

著者●手塚貴晴+手塚由比
体裁●A5判　ソフトカバー・296ページ
定価●2,310円（本体価格2,200円+税）

人気の若手建築家ユニット、手塚貴晴+手塚由比の作品集に待望の続巻が出ました。日本建築学会賞を受賞した「ふじようちえん」から今夏に竣工予定の「箱根彫刻の森美術館ネットの森」まで最新19作品を紹介。「こんな建築があったら」という施主の願望を大胆なアイデアで実現した作品群は必見です。建築設計への思いを熱く語ったエッセイ「懐かしい未来」も収録。

次号『TOTO通信』は2009年7月上旬発行の予定です。

2F

[Bookshop TOTO]
●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03(3402)1525

[TOTO出版]
●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03(3402)7138　●ファクス／03(3402)7187

全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

TOTO通信 2009年 春号

TOTO通信 2009年 春号 第53巻・第2号 通巻487号
発行日:2009年4月1日 発行所:TOTO株式会社 コミュニケーション推進部
〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TEL.03(5451)1131

静かなる存在感

Understated, but essential

毎日の暮らしの中で、主張しすぎず さりげなく、使う人の気持ちにそっと寄り添う。
高い品質と性能を備え、空間表現を乱さない。
空間の創り手の、使い手のイマジネーションを触発する「素材」としての水周り設備。
それが、TOTOの目指す水周り商品です。

PRINTED WITH SOY INK
この情報誌には海林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびにアメリカ大豆協会認定の大豆油インキを使用しています。

TOTO

TOTO NEW MATERIAL

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。

8152